

ナンバリングコード M2PSY-BCDM-40-Ex2 授業科目名 (時間割コード: 970001) 臨床心理学研究法特論 Special Studies in Research Methods of Clinical Psychology	科目区分	時間割 前期月5	対象年次及び専攻 医学系研究科修士課程
	水準・分野 M2PSY	DP・提供部局 BCDM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Ex	単位数 2	
担当教員名 神原 憲治, 山田 俊介, 竹森 元彦, 林 智一, 橋本 忠行, 角 徳文, 野口 修司, 川人 潤子, 谷渕 真也, 坂中 尚 哉, 長谷 綾子	関連授業科目	心理学研究法特論、課題研究 (修士論文)	
	履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習 (準備学習30時間 + 事後学習30時間)			
授業の概要 授業の概要 課題研究に関する発表や討論をゼミナール形式で継続的に検討する。また、10月に臨床心理学専攻全体で構想発表会を開催して、その発表と討議を通して、個々の課題研究の問題と目的をより明確にする。関連課題等に関する多面的・総合的な検討の機会とする。 学生各自は、このような検討の場を通して、研究課題を具体化・実践化する場とし、研究テーマに関する考察を深めるとともに、修士論文作成に繋ぐ機会として利用する。			
授業の目的 授業の目的 自らの研究課題を、ゼミナール形式で継続的に検討すると共に、臨床心理学専攻全体で年度を通して発表する。研究課題および関連課題に関する多面的・総合的な検討を行う。幅広い視野から研究テーマをとらえるとともに、発表を通して自らの問題意識を明確にする。また、研究を行う場合の留意点や倫理的配慮について習得する。研究発表およびプレゼンテーションの在り方についても学習する。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 自分の研究テーマについて、問題と目的、方法、課題についてわかりやすく記述して、発表をすることができる。(DPの「研究能力・応用力」に対応) 2. 発表をして得た意見や質問を通して、多面的・総合的な視点から、研究テーマや考え方をとらえなおし、生かすことができる。(DPの「倫理観・社会的責任」に対応) 3. 国内外の臨床心理学の研究動向を参照して、研究を計画及び遂行・議論できる。(DPの「グローバルマインド」に対応)			
成績評価の方法 成績評価の方法と基準 発表・討論等をもとに、総合的に評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 第1回 オリエンテーション 第2回 臨床心理学研究について1 第3回 臨床心理学研究について2 (論文指導教員届提出5月末まで) 第4回 研究予備調査について(文献レビューの方法と実践) 第5回 研究予備調査について(文献レビューに基づく研究課題の設定について) 第6回 修士論文中間発表会 (6月下旬) ※ 第7回 研究計画について (臨床心理学における研究法の選択について) 第8回 研究計画について (研究の対象者の設定と倫理的配慮について)			

- 第9回 研究計画について（研究計画の立案について）
- 第10回 構想発表会（10月下旬）
- 第11回 研究調査について（調査・実験の具体的手順について）
- 第12回 研究調査について（分析方法について）
- 第13回 研究調査について（結果のまとめ方について）
- 第14回 研究調査について（研究課題に沿った考察について）
- 第15回 修士論文発表会（2月）※

※ 発表は2年次生が行い、その討論に参加する。
以上の計画については、進捗状況などによって変更することがある。

【授業及び学習の方法】

オリエンテーションの後、学生は、自らの研究テーマを指導教員とともに検討すると共に、定期的な発表会にて研究を進める。発表会のうち、数回はM1・M2合同で行う。2年次学生の修士論文に関する発表を聞くことによって、自らの研究テーマや関連課題について多面的・総合的に考察する。
指導教員毎の具体的な内容は、担当院生の研究の問題の設定、その研究テーマに関しての論文レビュー、研究の進め方などの発表とそれに踏まえての教員と院生同士のディスカッション、教員による指導助言である。問題の設定及び論文レビューでは、国内外の臨床心理学の研究動向を参照して、議論・遂行・計画する。
構想発表会は、問題と目的、方法、結果と考察、今後の課題などの項目に沿って、研究の現状と課題等についてまとめて発表すると共に、ゼミ以外の教員や院生からも助言をもらう。
また、発表日時および場所等については、e-mail および掲示を通して周知する。

【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】

準備学習： 研究法や研究テーマに関する文献等を読んで内容、疑問点、意見をまとめておく。発表者はそれらを発表資料として準備する（各回2時間、計30時間）。
事後学習： 授業中の議論内容や教員からのコメントを振り返り、研究法に関する考察を深めるとともに、自分自身の研究への応用を考える（各回2時間、計30時間）。

教科書・参考書等

必要に応じて紹介する。

オフィスアワー オフィスアワー 月曜日12:00-13:00

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

履修上の注意・担当教員からのメッセージ 発表に対して、積極的に意見や質問を述べるのが大切である。また、発表者は、発表を通して多様な意見や質問を受けた後、意見や質問をした人に詳しく説明してもらうなどをするとより学習が深まる。

臨床心理士受験資格を得るための必修科目である。

ナンバリングコード M3PSY-ACXM-40-Lx2 授業科目名 (時間割コード: 970002) 臨床心理学特論 I Special Studies of Clinical psychology I	科目区分	時間割 前期火4	対象年次及び専攻 医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 ACXM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 山田 俊介	関連授業科目	臨床心理学特論 II	
	履修推奨科目		
学習時間 講義90分×15回+自学自習 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 心理臨床とは何か及び心理臨床家の役割に関する基本的な内容について演習を行う。 具体的には、心理臨床家の現況とアイデンティティ、心理臨床家の倫理、心理アセスメント、心理学的処遇、様々な援助施設における心理臨床などについてテキストの精読や発表、討議による演習を行う。			
授業の目的 心理臨床とは何か及び心理臨床家の役割について理解する。具体的には、心理臨床家の現況とアイデンティティ、心理臨床家の倫理、心理アセスメント、心理学的処遇、様々な援助施設における心理臨床などについて理解する。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 心理臨床家のアイデンティティや倫理について説明することができる (DPの「専門知識・理解」、「倫理観・社会的責任」に対応)。 2. 心理アセスメントの要点・留意点について説明することができる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 3. 心理療法の基本的ルールやプロセスについて説明することができる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 4. 様々な援助施設における心理臨床について説明することができる (DPの「専門知識・理解」、「倫理観・社会的責任」に対応)。 5. 心理臨床家をめざす上で、自分の今後の課題・習得する必要がある内容について述べる ことができる (DPの「専門知識・理解」、「倫理観・社会的責任」に対応)。			
成績評価の方法 発表・討議への取り組み (60%)、レポート (40%) により評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス			
【授業計画】 学生は順番にテキストを中心にまとめた発表資料を作成し、発表する。それを基に、討議を行う。また、最後にこの授業で学んだことについてレポートを作成する。 第1回 オリエンテーション 第2回 心理臨床家の現況 第3回 心理臨床家の倫理 第4回 心理アセスメント①インテーク面接 第5回 心理アセスメント②心理テスト 第6回 心理学的処遇①心理療法の準備と基本ルール 第7回 心理学的処遇②発達段階および自我の強さに応じた基本ルール 第8回 心理学的処遇③心理療法の過程で生じる諸問題 第9回 心理学的処遇④記録の意義と必要性 第10回 援助施設での心理臨床①児童援助施設 第11回 援助施設での心理臨床②子育て支援センター、総合病院の精神科など			

- 第12回 援助施設での心理臨床③大学の心理教育相談室、精神科病院など
第13回 援助施設での心理臨床④大学の保健管理センター、家庭裁判所など
第14回 援助施設での心理臨床⑤学校、私設心理相談室など
第15回 クライアントからの質問への応答

【授業及び学習の方法】

第1回では、授業全体の進め方についてオリエンテーションを行う。具体的には、テキストを中心にまとめた資料作成の仕方と発表の仕方、討議の進め方、発表の分担などについて確認をする。担当内容について、正確でわかりやすい発表資料を作成すること。授業の最後にこの授業で学んだことについてレポートを作成する。

第2回では、心理臨床家の現況、第3回では、心理臨床家に求められる倫理について議論する。

第4～5回では、心理アセスメントとは何か、インテーク面接や心理テストについて、その目的や具体的な方法についての全体像を把握し、議論する。

第6～9回は、心理学的処遇の多様性とその基礎としての心理療法について議論する。心理療法についての準備、基本的ルール、クライアントの発達段階及び自我の強さに応じた心理療法の基本ルール、記録など、心理療法の実際の際に生じてくる問題について議論する。

第10～14回は、多様な分野における各援助施設での心理臨床のあり方について、議論する。

第15回では、クライアントからの質問と具体的な応答例を通して、カウンセリングでクライアントから問われやすい問題と、そこへのカウンセラーの具体的な応答やその考え方について理解を深める。

この科目は全回対面授業で行います。なお状況によっては全てまたは一部の授業回の授業形態を遠隔へ変更する可能性があります。

【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】

準備学習：発表担当者はテキストの担当の内容について正確でわかりやすい発表資料を作成する。発表者以外はテキストの次回の範囲を熟読し、重要な点や疑問点を整理しておく（各回2時間、計30時間）。

事後学習：授業後には、その回で取り上げた内容、議論された内容について振り返り、重要な点を整理したり、さらに詳しい内容について調べたりする（各回2時間、計30時間）。

教科書・参考書等

『心理臨床家の手引き・第4版』 鎌幹八郎・名島潤慈編 誠信書房 2018年 3,630円

オフィスアワー 月曜日12:00-13:00

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

討議に真剣で積極的に参加することが望まれる。

臨床心理士受験資格を得るための必修科目である。

ナンバリングコード M3PSY-ADXM-40-Lx2 授業科目名 (時間割コード: 970003) 臨床心理学特論Ⅱ Special Studies of Clinical psychology Ⅱ	科目区分	時間割 後期水1	対象年次及び専攻 医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 ADXM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 竹森 元彦, 長谷 綾子	関連授業科目	臨床心理学特論Ⅰ	
	履修推奨科目		
学習時間 講義90分×15回+自学自習 (準備学習30時間 + 事後学習30時間)			
授業の概要 本授業では、臨床心理学の成立と展開、臨床心理学の対象論、臨床心理学の課題と展望について主体的に学ぶための講義を行う。それらの内容について、テキストの精読や発表、討議を含めた講義を行う			
授業の目的 本授業では、臨床心理学の定義、成立と展開、養成、対象論、課題と展望等の学習を通して、臨床心理学の原理や固有の方法論、パラダイムについて学び、公認心理師及び臨床心理士としての基礎について学習を深める。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 臨床心理学の定義、成立と展開、養成、対象論、課題と展望等について説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 2. 臨床心理学の原理や固有の方法論、パラダイムなどの説明ができる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 3. 公認心理師及び臨床心理士にとっての基礎的な知識や考え方を説明できる。(DPの「グローバルマインド」に対応)			
成績評価の方法 ・担当したテーマについての発表やレジュメ 50% ・レポート 50%			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス			
【授業計画】 第1回 臨床心理学の成立と展開 (臨床心理学の定義: 臨床心理学の枠組み) 第2回 臨床心理学の成立と展開 (臨床心理学の定義: 臨床心理学の独自性) 第3回 臨床心理学の成立と展開 (臨床心理学の歴史、諸外国の臨床心理学や心理的援助の実践に関する研究動向) - アメリカの臨床心理学小史、現代史 第4回 臨床心理学の成立と展開 (臨床心理学の歴史、諸外国の臨床心理学や心理的援助の実践に関する研究動向) - 日本の臨床心理学小史 第5回 臨床心理学の成立と展開 (臨床心理学と公認心理師・臨床心理士: 心理援助者養成に関する諸外国、日本の歴史や現状・動向) - 諸外国と日本の資格制度 第6回: 臨床心理学の成立と展開 (臨床心理学と公認心理師・臨床心理士: 心理援助者養成に関する諸外国、日本の歴史や現状・動向) - アメリカの養成システム 第7回 臨床心理学の成立と展開 (臨床心理学と公認心理師・臨床心理士: 心理援助者養成に関する諸外国、日本の歴史や現状・動向) - 日本の養成システム 第8回 臨床心理学の対象論 (概要、治療教育と予防の統合) 第9回 臨床心理学の対象論 (対象としての心の問題 - 怒り、喪失、うつ、人格) 第10回 臨床心理学の対象論 (対象としての心の問題 - 強迫性、関係性、摂食、アルコール) 第11回 臨床心理学の課題と展望 (国内の臨床心理学に関する研究動向と共に、諸外国の臨床心理学の先端の研究動向を参照して、国際的な研究にも目を向けて、研究を計画及び遂行・議論できる国際的な視野について議論する。) - 世界の臨床心理学の課題と展望 第12回 臨床心理学の課題と展望 (国内の臨床心理学に関する研究動向と共に、諸外国の臨床心理学の先端の研究動向を参照して、国際的な研究にも目を向けて、研究を計画及び遂行・議論できる国際的な視野について議論する。)			

－日本の臨床心理学の課題

第13回：臨床心理学の課題と展望（国内の臨床心理学に関する研究動向と共に、諸外国の臨床心理学の先端の研究動向を参照して、国際的な研究にも目を向けて、研究を計画及び遂行・議論できる国際的な視野について議論する。）－

日本の臨床心理学の現状分析と展望

第14回：臨床心理学における倫理問題、職業倫理

第15回：全体の振り返り

【授業及び学習の方法】

- ・第1回は、レクチャー。
- ・第2回～第14回までは、テキストにそって、発表者が内容の要旨をまとめてくる。その資料にそって、毎回進める。各回で、テキストに載っている内容に関連した、最新の論文などを調べる。
- ・毎回の発表内容に対するディスカッションは、討議内容に関連する課題を受けて、学生自身が主体となって、次回までに調べてくる。
- ・発表内容に関する臨床事例を含むレクチャーを行う。

【自学自習のためのアドバイス】

以下、自学自習時間（準備学習30時間+事後学習30時間）

第1回 臨床心理学とは何か（独自性）と課題について、アメリカの歴史や諸外国の資格の現状、日本の歴史や資格の現状、対象としての心の問題を通して展望する授業である。実際の臨床、自分とクライアントとの関係性を想像しつつ受講する必要がある。本講義を受講する上で、自分なりの問題意識を持つことが重要である。

第2～3回 臨床心理学は、知識や理論で実践できる学問ではなく、クライアントとの関係性がまずある。そのような枠組みや独自性について、考察する。臨床心理学とは何かについて、他の心理学との違いなどを通して、考察する。

第4～6回 諸外国と日本の資格の現状を知る。公認心理師や臨床心理士の資格について、世界基準との比較のなかで、特徴あるいは限界について、さらに調べ、考察する。授業中に検討された、臨床事例やレクチャーを参考にして、実際の臨床事例の支援という文脈の中で調べ、考察する。

第7～8回 諸外国の養成制度、日本の養成制度を知り、その比較から、特徴あるいは限界について、さらに調べ、考察する。

第9～11回 対象としての多様な心の問題について、考える。さらに、それぞれの心の問題について、調べ、考察する。

第12～14回 世界の臨床心理学と日本の臨床心理学の課題と展望を通して、日本の臨床心理学における学派の統合の重要性や、教育システムの現状と課題、今後の発展に方向性など、これからの臨床心理学のあり方について考察する。

第15回 全体を振り返り、参加者が、教員と共に振り返ることで、それぞれの問題意識について共有する。

教科書・参考書等

大塚義孝編 「臨床心理学原論」 誠信書房 2004年出版 ¥4,730

オフィスアワー 月曜日12:00-13:00

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

分担発表を行いますので、各回の担当者は事前に準備をお願いします。

臨床心理士受験資格を得るための必修科目である。

ナンバリングコード M3PSY-BCXM-40-Lx1 授業科目名 (時間割コード: 970004) 心理援助者のための職業倫理と研究・生命倫理 Professional ethics, study ethics and bioethics for clinical psychologist	科目区分	時間割 前期金2	対象年次及び専攻 医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 BCXM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 1	
担当教員名 林 智一, 藤原 祐一郎, 西山 成	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 講義90分×8回+自学自習30時間 (準備学習15時間+事後学習15時間)			
授業の概要 研究・倫理教育は、大学院課程のみならず、臨床心理学の研究と実践にあたる全ての研究者にとって重要な項目である。本科目では、臨床心理学専攻大学院生を対象とした研究・生命・医療倫理について講義を行う。また、研究という営みを行う専門職業人としての、さらには心理援助者としての、専門職としての倫理観の形成も将来に向けて不可欠である。そこで、本授業では、専門職としての倫理観を形成するための講義も合わせて実施する。			
授業の目的 研究の科学的意義が認められるには、研究倫理・生命倫理が担保されていることがベースとなる。さらに、医療領域における研究・実践の場合には、医療倫理が不可欠である。そこで、研究の根幹となるそれらの倫理性に対する十分な理解と見識を深めること、専門職としての倫理観が形成されることを目的とする。また、本授業では倫理意識・規範を継続的に持つことができるように、定期的に講演会等に参加することが求められている。(CB)			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 研究の根幹となる倫理性に対する十分な理解と見識を深めることができる(DPの「倫理観・社会的責任」、「研究能力・応用力」に対応)。 2. 専門職としての倫理観について十分な理解と見識を深めることができる(DPの「倫理観・社会的責任」に対応)。 3. 定期的に講演会等に参加し、研究・生命に関する倫理意識・規範を継続的に持つことができる(DPの「倫理観・社会的責任」、「研究能力・応用力」に対応)。			
成績評価の方法 レポート(70%)及びディスカッションでの発表・検討の内容(30%)によって評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス			
【授業計画】 講義形式で行われる。研究・生命・医療倫理に係る基本的な考え方を過年度の事例等から学ぶ。 第1回 職業倫理に関する講義①専門職としての倫理観に関する基礎概念 第2回 職業倫理に関する講義②専門職としての倫理観の形成プロセスと専門職業人の成長段階 第3回 職業倫理に関する講義③専門職としての倫理観に関する職業実践上の諸課題 第4回 研究倫理に関する講義①研究倫理に関する基礎概念 第5回 研究倫理に関する講義②研究倫理に関する実践上の諸課題 第6回 生命倫理に関する講義①生命・医療倫理に関する基礎概念 第7回 生命倫理に関する講義②生命・医療倫理に関する実践上の諸課題 第8回 研究・生命・医療倫理に関するまとめ			
【授業及び学習の方法】 研究倫理、生命倫理、医療倫理、職業倫理に関する講義は、医師、医学研究者及び心理援助者である教員が担当し、レポートを課して評価する。第7・8回のまとめでは、受講者による倫理問題に関する発表会を実施し、その内容を教員が評価する。 研究・倫理教育は大学院課程のみならず、研究にあたる全ての研究者にとって重要な項目であることから、香川大学医学部倫理委員会が主催となって、セミナー、E-Learningによる教育訓練(eAPRINの活用含む)、研究倫理・生命倫理・医療倫理に関する講演会(年間3-4回)を定期的に開催している。これらにも参加して、継続的に倫理意識の向			

上に努められるプログラムを用意している。また、大学院の共通科目の医科学概論や医科学特論でも研究・生命倫理・医療倫理を扱っている。

なお、倫理委員会等主催の講演会に出席の上、提出したレポートが担当教員の評価により合格となった場合、1コマ分として読み替えが可能である。講演会の読み替えは、最大2コマまでとする。担当教員が指示した回を受講のこと。eAPRINのE-Learningについては、修了証の写しの提出をもって1コマ分として読み替えが可能である。

【自学自習のためのアドバイス】

第1回～3回 授業内容及び授業中に示した教科書・参考書をもとに、専門職としての倫理観について整理してください。また、重要な用語や概念について、予習として図書館などを利用して調べてください（事前学習2時間×3回＝6時間）。理解が不十分と思われる重要な用語や概念について、復習として図書館などを利用して調べてください。さらに、授業での討論内容なども参考にして、想定される倫理的問題について考察を進めてください（事後学習2時間×3回＝6時間）。

第4～6回 授業内容及び授業中に示した教科書・参考書をもとに、研究倫理と生命倫理について整理して、発表資料および質疑応答の準備をしてください。また、重要な用語や概念について、予習として図書館などを利用して調べてください（事前学習2時間×3回＝6時間）。セミナーやE-Learning受講後、理解が不十分と思われる重要な用語や概念について、復習として図書館などを利用して調べてください。さらに、授業での討論内容なども参考にして、想定される倫理的問題について考察を進めてください（事後学習2時間×3回＝6時間）。

第7, 8回 授業内容および授業中に示した教科書・参考書、図書館などを利用して、研究倫理・生命倫理・医療倫理に関して授業のまとめの発表資料作成および質疑応答の準備をしてください（事前学習2時間×1回＋1時間×1回＝5時間）。また、重要な用語や概念、質疑応答で解決しなかった疑問について、復習として図書館などを利用して調べてください。さらに、発表を聞いたり討論したりした内容などを参考にして、想定される倫理的問題について考察を進めてください（事後学習2時間×1回＋1時間×1回＝3時間）。

【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】

準備学習：文献等を読んで事前に重要な知識、疑問点、意見をまとめておく（2時間×7回、1時間×1回、計15時間）。
事後学習：授業中の討論内容や教員からのコメントを振り返り、倫理に関する考察を深めるとともに、自分自身の研究・心理臨床への応用を考える（2時間×7回、1時間×1回、計15時間）。

教科書・参考書等

教科書・参考書特別には定めませんが、担当教員が適宜紹介する。

オフィスアワー 水曜日16:20-17:00

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

出席を重視する。講演会の開催告知のアナウンスに留意すること。

ナンバリングコード M3PSY-AXXM-40-Lx1 授業科目名 (時間割コード: 970005) 心理援助職のための応用医学特論 Advanced medical lecture for psychological support professionals	科目区分	時間割 前期月3	対象年次及び専攻 医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 AXXM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 1	
担当教員名 坂東 修二, 山本 融, 横平 政直, 日下 隆, 辻 晃仁, 宮武 伸行, 清水 裕子, 中條 浩介, 長谷 綾子	関連授業科目 授	精神医療における心理支援、心身医学と心理支援	
	履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×11回 + 自学自習 (事前学習12時間+事後12時間)			
授業の概要 この授業では、臨床心理学に関係の深い医学的内容についての講義を行い、受講生の心理援助を行うに当たって必要な医学的知識についての学びを深める。			
授業の目的 医療の現場においては、疾患の存在そのものが患者の心理に多大な影響を与えるものがあり、また、診断や治療の過程で高度な倫理的・心理学的判断を必要とする領域がある。これらは、悪性腫瘍、MRSAやHIV等の感染症、環境因子による疾患、ゲノム医療などである。また終末期医療についてもますます心理的援助が必要とされている。 このような背景の下、心理援助職にとってとりわけ知識と理解が必要な医療分野のあり方について理解と考察を深めることをこの授業の目的とする。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 疾患の良性・悪性を判断するために必要な病理学の概要を説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 2. 患者の心理に大きな影響を与える悪性腫瘍の診断や治療についての概要とそれらが患者心理に及ぼす影響を説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 3. 患者の心理に大きな影響を与える感染症についてその概要と患者心理に及ぼす影響を説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 4. 患者を取り巻く環境因子の概要と患者心理との関連について説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 5. 脳の働きと心理との関係を生物学的に説明するブレイン・サイエンスの概要を説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 6. ゲノム医療についてその倫理的側面も含めて概説できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 7. 緩和ケアの概要を説明でき、心理援助職の役割について説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 8. 今日の終末期医療のあり方について概説でき、心理援助職の役割について説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 9. 遺族のグリーフ・ケアの要点を説明でき、心理援助の方法について考察できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。			
成績評価の方法 1) 講義毎にレポートを記載させ、それを評価の一環とする。50% 2) 知識面について筆記試験 (多選択肢型と記述式) を行う。50% これらにより評価を行う。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 第1回 心理援助職のための腫瘍病理学概説 (横平) 第2回 心理援助職に必要な臨床腫瘍学概説 (村上あきつ)			

- 第3回 悪性腫瘍に対する化学療法についての概論（辻）
- 第4回 MRSAやB型肝炎ウイルス等の院内感染及びHIV感染についての感染症概論（坂東）
- 第5回 環境因子と疾患との関係について（宮武）
- 第6回 ゲノム医療の概論とその倫理的側面について（日下）
- 第7回 ブレイン・サイエンス概論（山本融）
- 第8回 緩和ケアの概要と心理援助職に期待される役割について（中條）
- 第9回 今日の終末期医療のあり方の概要と心理援助職に期待される役割について（清水）
- 第10回 遺族のグリーフ・ケアのあり方と心理援助職に期待される役割について（清水）
- 第11回 まとめ・試験（坂東）

【授業および学習の方法】

医学的内容については多岐にわたるため、それぞれの専門教員によるオムニバス形式で授業を行う。各領域の医学的知識については主として講義形式で行うが、それぞれの領域の心理援助職としての役割については十分な自己学習を必要とする。

【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】

準備学修：医学的知識を吸収するのみで無く、その知識をどのような形で心理援助につなげていくのかという視点で予習する。（各回1時間、計30時間）

事後学修：各授業後には配布された資料やノートを基に、医学的知識を吸収するのみで無くその知識をどのような形で心理援助につなげていくのかという視点で1時間程度の復習を行う。（計30時間）

教科書・参考書等

教科書等については、授業中に適宜紹介する。

オフィスアワー 金曜日午後2時から4時。それ以外については適宜メールで相談のこと。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

特になし

ナンバリングコード M3PSY-ACXM-40-Lx1 授業科目名 (時間割コード: 970006) 心理援助職のための多職種連携 Interprofessional Collaboration for Clinical Psychologist	科目区分	時間割 前期月4	対象年次及び専攻 医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 ACXM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 1	
担当教員名 竹森 元彦, 長谷 綾子, 野口 修司, 坂東 修二, 清水 裕子	関連授業科目	心理援助職のための応用医学特論、心理実践実習A~D	
	履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×11回+自学自習(事前学習 15時間 + 事後学習15時間)			
授業の概要 この授業では、心理援助職のための多職種連携についての講義(心理援助職、医師、看護師のそれぞれの思考過程の比較を通して)と議論、実践場面のシナリオ作成やロールプレイなどを通して、心理的援助を行うに当たって必要な多職種連携の概念、チームにおける心理援助職の独自性と求められる役割に基づいた、具体的なコミュニケーション・姿勢や態度のあり方など、心理援助職の立場から多職種の力をどのように引き出すのかなどについて、演習を含めた講義を行う。			
授業の目的 医療・教育・福祉等の分野においては多職種によるチーム支援を行うことが不可欠になっている。本科目では、チーム支援の必要性を十分に認識し、心理援助職の独自性と求められる役割、心理的な支援を要する対象へのチームアプローチを理解すること、さらに心理援助職として多職種の力を引き出す態度や言動について学ぶことを目的とする。また、その際に生じる課題や困難、倫理的問題について、実践例を通じて学ぶ。具体的には、グループワークやシナリオ作成、ロールプレイ等を行う。本科目の学習を通じて、その後、開始する心理実践実習において、実践現場での多職種連携の理解へとつなげていく。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 心理援助職にとっての多職種連携の必要性について説明できる。(DPの「専門的知識・理解」) 2. 心理援助職の多職種連携における独自性と医療の中で求められる役割について説明ができる。(DPの「専門的知識・理解」) 3. 心理に関する支援を要する者へのチームアプローチについて説明できる。(DPの「専門的知識・理解」) 4. 多職種連携に必要なコミュニケーションや姿勢・態度について説明ができる。(DPの「専門的知識・理解」) 5. 多職種連携における心理援助職の実践的な難しさや課題について説明できる。(DPの「倫理観・社会的責任」) 6. 多職種連携における守秘義務・職業倫理及び法的義務等を説明できる。(DPの「倫理観・社会的責任」)			
成績評価の方法 1) 講義毎にレポートを記載させ、それを評価の一環とする。30% 2) シナリオやロールプレイについては、レポートを作成させ、それを評価の一環とする。30% 3) 心理援助者における多職種連携についての総括的なレポート(今後の実習に向けての学習上の視点・課題などを含む) 40% これらにより評価を行う。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】			

- 第1回 多職種連携とは何か、多職種連携が必要とされる背景、心理援助職へ期待と役割、シナリオ（竹森）
- 第2回 心理援助職の多職種連携とは何か：グループワーク、ロールプレイの議論を通して（竹森）
- 第3回 チーム医療における医師の役割と、心理援助職に期待する役割（板東）
- 第4回 チーム医療における看護師の役割と、心理援助職に期待する役割（清水）
- 第5回 心理援助職のための多職種連携（野口）
- 第6回 震災における心理援助職の多職種連携について（野口）
- 第7回 心理援助職のための多職種連携（長谷）
- 第8回 医療における心理援助職の多職種連携について（長谷）
- 第9回 心理援助職のための多職種連携（竹森）
- 第10回 スクールカウンセラーの多職種連携について（竹森）
- 第11回 全体のまとめと振り返り：心理援助職の多職種連携

【授業及び学習の方法】

多職種連携については、基本理念を講義形式で行った後、医師と看護師の立場から講義を受けて、それぞれの職種の独自性と共に、多職種連携に至る心理援助職の独自性について議論をする。シナリオ法やロールプレイにより、具体的な場面を通してグループディスカッションによって、心理援助職の多職種連携の難しさと、多職種連携を引き出すコミュニケーションや姿勢・態度について理解する。さらに、医療、災害、教育における多職種連携についての講義を行う。

講義毎にレポートを書き、シナリオやロールプレイについてのレポートを課す。全体のまとめと振り返りを通して、“心理援助職にとっての多職種連携と、今後の学習の視点・課題”などのテーマについて総括のレポートを課す。

【自学自習のためのアドバイス】

以下、内容について自学自習時間を準備学習15時間、事後学習15時間とする。

- 第1回～第2回 心理援助職における多職種連携について概説（1回）及び演習（2回）を通して、この授業における自らの問題意識を明確にし、あるいは解決したい課題などについて、文献も調べて、レポートを作成する。
- 第3回～第4回 医師と看護師の専門職から、医師や看護師の役割と、心理援助職に期待する役割について授業で学び、それをもとに、多職種から見た心理職のあり方についてレポートを作成する。
- 第5回～第7回 シナリオ法やロールプレイ等のグループ演習と議論を通して、多職種連携に求められる姿勢や守秘義務の問題など、心理職特有の難しさや課題などについて、レポートを作成する。
- 第8～第10回 医療、震災などの緊急支援、教育の領域における多職種連携の実際の講義と議論を通して、他職種との連携の実際や課題、心理援助職としてどうあるべきかなど、レポートを作成する。
- 第11回 全体のまとめと振り返りを行い、心理援助職の多職種連携というテーマにて、文献を調べて、最終のレポートを作成する。

教科書・参考書等

教科書等については、授業中に適宜紹介する。

オフィスアワー 前期 月曜日 12:00～13:00

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

この科目は基本的に対面実習を行います。なお状況によっては、授業形態を遠隔へ変更する可能性があります。

ナンバリングコード M3PSY-ABCM-40-Lx2 授業科目名 (時間割コード: 971001) 臨床心理面接特論Ⅰ (心理支援に関する理論と実践) Special Studies of Clinical Interviewing I (Theory and Practice of Psychological Support)	科目区分	時間割 前期木2	対象年次及び専攻 医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 ABCM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 竹森 元彦, 谷渕 真也	関連授業科目	臨床心理面接特論Ⅱ	
	履修推奨科目	力動的心理療法特論、臨床心理学特論Ⅰ 臨床心理学特論Ⅱ	
学習時間 講義90分×15回+自学自習 (準備学習30時間 + 事後学習30時間)			
授業の概要 臨床心理面接は、臨床心理学的援助をおこなう際の基本的な関わりである。面接者としての関わりを具体的に想起できるようになり、臨床心理面接の基本を身につけることを目的として、各技法のロールプレイや事例検討、相談室及び遊戯療法室の見学等を行う。具体的には、臨床心理学における援助論、臨床心理面接学、心理療法の歴史と哲学などについて講義・演習を行う。また、臨床心理面接技法（力動論、行動論・認知論、家族療法・夫婦療法、遊戯療法、物語アプローチ）について、院生が分担発表とロールプレイや事例論文の検討を行う。			
授業の目的 授業では、まず援助について取り上げる。そして、臨床心理面接学の定義、歴史と哲学について学ぶ。そして、臨床心理面接に必要な基本概念の講義ののち、臨床心理面接技法として、力動論、行動論・認知論、システム論・家族療法・夫婦療法、遊戯療法、物語りアプローチについて取り上げる。受講者による発表とともに、ロールプレイ等による実技訓練、事例論文の検討、心理相談室及び遊戯療法室の見学等をおこなう。これらの体験的な学びを通して、公認心理師と臨床心理士としての考え方、基本的な心理面接技法、それぞれの技法における面接者としての関わり方の具体を理解することを目的とする。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 臨床心理学における援助という固有の専門性について説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 2. 臨床心理面接学の定義や歴史、哲学、理論について説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 3. 力動論に基づく心理療法の理論と方法を説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 4. 行動論・認知論に基づく心理療法の理論と方法を説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 5. 家族療法・夫婦療法、遊戯療法、ナラティブの心理療法の理論と方法を説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 6. 心理に関する相談、助言、指導等への上記3から5までの応用を説明できる。(DPの「研究能力・応用力」に対応) 7. 心理に関する支援を要する者の特性や状況に応じた適切な支援方法の選択・調整について説明できる。(DPの「倫理観・社会的責任」に対応)			
成績評価の方法 ・担当したテーマについての発表や検討の内容 50% ・レポート 50%			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 第1回：オリエンテーション、臨床心理面接とは 第2回 臨床心理学の援助論① 第3回：臨床心理学の援助論②			

- 第4回 心理面接理論モデル 心理面接の歴史と哲学①
- 第5回 心理面接理論モデル 心理面接の歴史と哲学②
- 第6回：力動論に基づく心理療法の理論と方法①
- 第7回 力動論に基づく心理療法の理論と方法②
- 第8回：行動論・認知論に基づく心理療法の理論と方法①
- 第9回 行動論・認知論に基づく心理療法の理論と方法②
- 第10回：システム論 家族療法・夫婦療法①
- 第11回 システム論 家族療法・夫婦療法②
- 第12回：遊戯療法①
- 第13回：遊戯療法②
- 第14回：物語りアプローチ
- 第15回：まとめ・振り返り

【授業及び学習の方法】

- ・第1回は、レクチャー。第2回～第14回までは、テキストにそって、発表者が内容の要旨をまとめてくる。
- ・その資料にそって、毎回進める。また、テキストに載っている内容に関連した、最新の論文などを調べる。その内容をもとに、グループでの質疑応答をしたり、教員がコメントをする。
- ・家族療法の際には、ファミリー・ロールプレイを行う。
- ・行動論・認知論の際には、認知行動療法についてのロールプレイを行う。
- ・遊戯療法の際には、心理臨床相談室のプレイルームや箱庭を体験する。
- ・力動、行動、システム、ナラティブなどの統合的な心理療法の立場にたちながら、その上で、各心理療法の理論と方法、有効性と限界などを学ぶ。
- ・毎回の発表内容に対するディスカッションは、討議内容に関連する課題を受けて、学生自身が主体となって、次回までに調べてくる。また毎回、発表内容に関する臨床事例を含むレクチャーを行う。

【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】

準備学習：臨床心理面接に関する文献等を読んで内容、疑問点、意見をまとめておく。発表者はそれらを発表資料として準備する（各回2時間、計30時間）。

事後学習：授業中の議論内容や教員からのコメントを振り返り、臨床心理面接に関する考察を深めるとともに、実際の臨床活動への応用を考える（各回2時間、計30時間）。

【自学自習のためのアドバイス】

各療法について、知識だけではなく、実際の臨床場面にひきつけて、理解するようにする。具体的なクライアントがいて、そのニーズに沿ったかたちで、それぞれの療法を行うようなかたちでイメージをする。○○療法の知識と共に、クライアントの訴えやニーズにあった用い方をするように、バランスよく身に付けるように気を付ける。それぞれの療法についてさらに研鑽して、自らの基盤とする療法をみつけて、発展的に学びを深めるようにする。授業は、大枠の知識を身に付ける始まりであって、その後の、自学自習こそが、本当の臨床の力につながることを心したい。

教科書・参考書等

大塚義孝編 「臨床心理学原論」 誠信書房 2004年出版 価格4300円（+税）の一部を用います。また、東山紘久編「臨床心理面接学」 誠信書房 2005年出版 価格4000円（+税）の一部を用います。

オフィスアワー 月曜日16:20-17:50

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

発表者は、分担部分をまとめて、疑問点や討議すべき点について発表する。各人もまた、テキストを読んで、回ごとに疑問点や討議すべき点についてまとめておいてください。議論の中での課題がでた場合、論文を調べたり、次回までに調べる等、を行うこと。

公認心理師受験資格及び臨床心理士受験資格を得るための必修科目である。

ナンバリングコード M3PSY-AXXM-40-Lx2 授業科目名 (時間割コード: 971002) 臨床心理面接特論Ⅱ Special Studies of Clinical Interviewing Ⅱ	科目区分	時間割 後期火4	対象年次及び専攻 医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 AXXM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 山田 俊介	関連授業科目	臨床心理面接特論Ⅰ	
	履修推奨科目		
学習時間 講義90分×15回+自学自習(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 代表的な臨床心理面接の理論と進め方について及び、臨床心理面接の各アプローチに関する特徴、意義、進める上での要点・留意点、臨床心理面接を行うことができるようになる上で、自分の今後の課題・習得する必要がある内容などについて演習を行う。 具体的には、①クライアント中心療法の面接事例、②親子並行面接の理論と進め方、③グループ・アプローチの理論と進め方、④コンサルテーションの理論と進め方について文献の精読や発表、討議による演習を行う。			
授業の目的 代表的な臨床心理面接のアプローチであるクライアント中心療法、親子並行面接、グループ・アプローチ、コンサルテーションの理論と進め方について理解する。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 臨床心理面接の各アプローチについて、その特徴、意義、進める上での要点・留意点を説明することができる(DPの「専門知識・理解」に対応)。 2. 臨床心理面接を行うことができるようになる上で、自分の今後の課題・習得する必要がある内容について述べる(DPの「専門知識・理解」に対応)。			
成績評価の方法 発表・討議への取り組み(60%)、レポート(40%)により評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス			
【授業計画】 前半は指定された文献を事前に熟読した上で、討議を行う。 後半は、学生は順番に指定された文献を中心にまとめた発表資料を作成し、発表する。それを基に、討議を行う。また、最後にこの授業で学んだことについてレポートを作成する。			
第1回 オリエンテーション 第2回 クライアント中心療法：H. ブライアンの事例 第1回面接 第3回 クライアント中心療法：H. ブライアンの事例 第2回面接 第4回 クライアント中心療法：H. ブライアンの事例 第3回面接 第5回 クライアント中心療法：H. ブライアンの事例 第4回面接 第6回 クライアント中心療法：H. ブライアンの事例 第5回面接 第7回 クライアント中心療法：H. ブライアンの事例 第6回面接 第8回 クライアント中心療法：H. ブライアンの事例 第7、8回面接 第9回 親子並行面接①家族との関わりのタイプ 第10回 親子並行面接②目的と機能 第11回 親子並行面接③治療過程と技法原則 第12回 グループ・アプローチ①定義と分類、歴史 第13回 グループ・アプローチ ②特色と過程 第14回 コンサルテーション①定義と特性、種類 第15回 コンサルテーション②機能と過程			

【授業及び学習の方法】

第1回は、授業全体の進め方についてオリエンテーションを行う。後半のテキストを中心にまとめた資料作成の仕方と発表の仕方、討議の進め方、発表の分担などについて確認をする。担当内容について、正確でわかりやすい発表資料を作成すること。

第2回～第8回は、指定された文献を事前に熟読した上で、討議を行う。クライアント中心療法については、具体的な事例をもとに、理解を深める。

第9回～第15回は、親子並行面接、グループ・アプローチ、コンサルテーションについて、学生は順番に指定された文献を中心にまとめた発表資料を作成し、発表する。それを基に、討議を行う。

最後にこの授業全体で学んだことについてレポートを作成する。

この科目は全回対面授業で行います。なお状況によっては全てまたは一部の授業回の授業形態を遠隔へ変更する可能性があります。

【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】

準備学習：第1回～第8回は、指定された文献を熟読し、重要な点や疑問点を整理しておく。第9回～第15回は、発表担当者は指定された文献の内容について正確でわかりやすい発表資料を作成する。発表者以外は次回のテーマ・内容について調べ、重要な点や疑問点を整理しておく（各回2時間、計30時間）。

事後学習：授業後には、その回で取り上げた内容、議論された内容について振り返り、重要な点を整理したり、さらに詳しい内容について調べたりする（各回2時間、計30時間）。

教科書・参考書等

授業の中で必要に応じて文献を配布または紹介する。

オフィスアワー 月曜日12:00-12:50

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

討議に真剣で積極的に参加することが望まれる。

臨床心理士受験資格を得るための必修科目である。

ナンバリングコード M3PSY-ABXM-40-Ex2 授業科目名 (時間割コード: 971003) 臨床心理査定演習Ⅰ (心理的アセスメントに関する理論と実践) Practicum of Clinical Psychological Assessment I (Theory and Practice of Psychological Assessment)	科目区分	時間割 前期火1	対象年次及び専攻 医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 ABXM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Ex	単位数 2	
担当教員名 橋本 忠行, 谷渕 真也, 坂中 尚哉	関連授業科目 臨床心理査定演習Ⅱ	履修推奨科目	
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 この科目では、臨床心理査定(心理アセスメント)の定義、倫理、歴史、方法、そして研究法について、公認心理師・臨床心理士としての実践に活かすことを念頭においた講義とディスカッションを行う。臨床心理学的支援に必要なとされる各種心理検査を、受講生が標準化された方法で実施できるようになるために、さまざまな演習をおこなう。			
授業の目的 ①心理査定的基本的な考え方や態度を習得すること、②個別式知能検査(成人・児童)、神経心理学的検査、症状評価尺度、描画法、そしてMMPIの実施・分析・解釈ができるようになること、の2点を目的とする。本科目で取り上げる検査は、教育、司法、医療、福祉そして産業などの領域で幅広く使用されているものである。標準化された方法で実施できるようになることは、対象となる方を正確に理解するためにも欠かせない。心理査定技術者(Technician)としての側面を磨く。臨床心理査定におけるDSM、ICDといった診断基準の活用、心理検査を含むアセスメントに関する技法の活用、APAを含む倫理指針、については海外での研究や臨床実践を踏まえた講義・演習を行う。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 公認心理師・臨床心理士の実践における心理的アセスメントの意義を説明できる(DPの「専門知識・理解」に対応)。 2. 心理的アセスメントに関する理論と方法を説明できる(DPの「専門知識・理解」に対応)。 3. 知能検査、神経心理学的検査、パーソナリティ検査(質問紙法)、症状評価尺度、描画法を標準化された方法で実施-結果整理-解釈する。その一連の過程を修得する(DPの「研究能力・応用力」に対応)。 4. 心理に関する相談、助言、指導等への上記1~3の応用が可能になる(DPの「研究能力・応用力」に対応)。			
成績評価の方法 発表(45%)、レポート(45%)、演習と演習におけるディスカッションへの貢献(10%)により評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画及び学習の方法】 講義、発表、テキスト購読、アセスメント技法の演習を組み合わせ実施する。 第1回: オリエンテーション / 公認心理師・臨床心理士の実践における心理的アセスメントの意義 第2回: 心理的アセスメントの考え方 第3回: 相談・助言・指導などへの応用 第4回: 保健医療分野/教育分野/司法・犯罪分野などにおける心理的アセスメントの実際 第5回: 個別式知能検査(WISC-IV/V)の演習: 実施法、結果の整理と解釈 第6回: 個別式知能検査(K-ABC2)の演習: 実施法 第7回: 個別式知能検査(K-ABC2)の演習: 結果の整理と解釈 第8回: 個別式知能検査(WAIS-IV/V)の演習: 結果の整理と解釈 第9回: 個別式知能検査(WAIS-IV/V)の演習: 実施法 第10回: 神経心理学的検査の演習①(Bender Gestalt Test, Rey-Osterrieth複雑図形、WCST等) 第11回: 神経心理学的検査の演習②(三宅式記銘力検査、HDS-R、MMSE等) 第12回: 症状評価尺度の演習(BDI-II、CES-D、DES、Y-BOCS等) 第13回: MMPIの演習(追加尺度等含む)とフィードバック			

第14回：描画法の活用（S-HTP / 風景構成法 / 多文化理解におけるBaum Test）

第15回：事例研究：子どもと家族の心理アセスメント

第1回～第4回では各テーマについての講義と、テキスト講読による学生の発表、小グループでのディスカッションを組み合わせる。第5回～第14回の各アセスメント技法の演習では、①各技法の標準的な実施法、②結果の整理、③解釈と報告（レポートの作成）、④臨床的活用の流れで学習を進め、その一連の過程を修得する。第15回の実例研究では、担当教員が提示する事例をもとに小グループでの演習を行う。この科目は全回対面授業を行う。なお状況によっては授業形態を全て対面または遠隔へ変更する可能性がある。

【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】

自学自習（準備学習 30時間 + 事後学習 30時間）

準備学習：テキスト等を読んで内容、疑問点、意見をまとめておく。発表者はそれらを発表資料として準備する（各回2時間、計30時間）。

事後学習：授業中の議論内容や演習でのポイント、教員からのコメントを振り返り、心理的アセスメントの実際に関する考察を深める。心理検査のレポートを作成する（各回2時間、計30時間）。

教科書・参考書等

- ・「公認心理師 実践ガイダンス 1. 心理的アセスメント」（橋本忠行・酒井佳永編著、木立の文庫、2019年、2,970円）
- ・論文、各検査のマニュアル等、適宜紹介する。

オフィスアワー 火曜日12:00-13:00

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

公認心理師・臨床心理士受験資格を得るための必修科目である。

ナンバリングコード M3PSY-ABXM-40-Ex2 授業科目名 (時間割コード: 971004) 臨床心理査定演習Ⅱ Practicum of Clinical Psychological Assessment Ⅱ	科目区分	時間割 後期火1	対象年次及び専攻 医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 ABXM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Ex	単位数 2	
担当教員名 橋本 忠行	関連授業科目	臨床心理査定演習Ⅰ (心理的アセスメントに関する理論と実践)	
	履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 「臨床心理査定演習Ⅰ (心理的アセスメントに関する理論と実践)」を更に発展させ、質的データと量的データが共に重視される心理検査 (PF-Study等) について授業を行う。また、より複雑であるロールシャッハ法 (包括システム) についても、その実施から報告書作成までを演習する。その後医療分野や教育分野など、さまざまな分野における心理アセスメントの手続きについて、心理的支援の対象者 (クライアントやその家族など) と協働的な関係を築きながら実践する方法を習得させる。加えてそれらと結びついた近年の国内外の研究を合わせて紹介し、臨床心理査定の研究法としての側面についても理解が深められるようにする。			
授業の目的 ①ロールシャッハ法 (包括システム) の実施・分析・解釈・報告書作成ができるようになる、②協働的/治療的アセスメントの実践を学ぶ、の2点を目的とする。対象となる方のこころの内側を理解し、さらに得られた理解を実際の支援につなげていく過程を学ぶ。「心理的アセスメントに関する理論と実践 (臨床心理査定演習Ⅰ)」における心理査定の技術者としての側面に加え、査定者 (Assessor) としての効果的なはたらきかけができるようになる。また心理アセスメントの事例研究では、こころと身体つながりへの理解や、多文化理解/共生の視点が重要であることを学ぶ。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 医療・教育・福祉・司法の各分野で、臨床心理査定を実施するための主要な知識と技術を身につける (DPの「専門知識・理解」に対応)。 2. ロールシャッハ法 (包括システム) を標準化された方法で実施-結果整理-解釈する。その一連の過程を体得し、報告書の作成ができるようになる (DPの「研究能力・応用力」に対応)。 3. 臨床心理査定の研究法を理解する (DPの「専門知識・理解」に対応)。 4. 臨床での心理アセスメントの基本的な手続きについて、演習を通して習得する (DPの「研究能力・応用力」に対応)。			
成績評価の方法 発表 (45%)、レポート (45%)、演習におけるディスカッションへの貢献 (10%) により評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 講義、発表、テキスト購読、アセスメント技法の演習を組み合わせ実施する。 第1回: オリエンテーション 第2回: 心理アセスメントの事例研究1 (医療分野: 心身関連の事例) 第3回: PF-Studyの演習: 実施法とコーディング 第4回: PF-Studyの演習: 結果の整理と解釈 第5回: 心理アセスメント報告書の作成 第6回: 臨床心理査定の研究法 第7回: ロールシャッハ法 (包括システム) の演習: 実施法 第8回: ロールシャッハ法 (包括システム) の演習: コーディングと結果の整理 第9回: ロールシャッハ法 (包括システム) の演習: 解釈			

第10回：ロールシャッハ法（包括システム）の演習：事例演習1
第11回：ロールシャッハ法（包括システム）の演習：事例演習2
第12回：ロールシャッハ法（包括システム）の演習：事例演習3
第13回：協働的/治療的アセスメントの実践
第14回：心理アセスメントの事例研究2（司法分野：多文化理解/共生の事例）
第15回：医療・教育・司法等の分野における心理的アセスメントの実践

【授業及び学習の方法】

第1回、第5回、第6回、第13回、第15回では各テーマについての講義と、テキスト・論文講読による学生の発表、小グループでのディスカッションを組み合わせる。第2回と第14回的事例研究では、担当教員が提示する事例をもとに小グループでの演習を行う。第3～4回と第7～12回の各心理検査（投映法）の演習では、①各技法の標準的な実施法、②結果の整理、③解釈と報告（レポートの作成）、④臨床的活用の流れで学習を進め、その一連の過程を修得する。ロールシャッハ法の演習については、学生が査定者として検査を実施する前に、授業時間外に被検査者として自らが検査を受ける機会を設ける。各心理検査の②結果の整理、③解釈と報告については、学生が自ら実施した各心理検査のデータをもとに発表を行う。この科目は全回対面授業を行う。なお状況によっては授業形態を全て対面または遠隔へ変更する可能性がある。

【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】

自学自習（準備学習 30時間 + 事後学習 30時間）

準備学習：テキスト等を読んで内容、疑問点、意見をまとめておく。発表者はそれらを発表資料として準備する（各回2時間、計30時間）。

事後学習：授業中の議論内容や演習でのポイント、教員からのコメントを振り返り、心理的アセスメントの実際に関する考察を深める。心理検査のレポートを作成する（各回2時間、計30時間）。

教科書・参考書等

・論文、各検査のマニュアル等、適宜紹介する。

オフィスアワー 火曜日12:00-13:00

履修上の注意・担当教員からのメッセージ
臨床心理士受験資格を得るための必修科目である。

ナンバリングコード M3PSY-ACXM-40-Px2 授業科目名 (時間割コード: 971005) 臨床心理基礎実習 Practice in Clinical Psychology: Basic Practice in Clinical Psychology: Basic	科目区分	時間割 前期水3~4	対象年次及び専攻 医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 ACXM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Px	単位数 2	
担当教員名 山田 俊介, 竹森 元彦, 橋本 忠行, 林 智一, 坂中 尚哉, 谷渕 真也	関連授業科目	面接技法演習	
	履修推奨科目 臨床心理面接特論 II	履修推奨科目 臨床心理学特論 I、臨床心理学特論 II	
学習時間 実習90分×2コマ×30回+自学自習(準備学習30時間 + 事後学習30時間)			
授業の概要 以下の内容を通して、カウンセラーとしての基本的姿勢と基本的技能を学習する。 オリエンテーションの後、自己理解を深めるための基礎的体験学習、カウンセリング・ロールプレイの演習を心理臨床相談室の面接室等で実施し、その検討を行う(1グループ5人程度のグループ・スーパービジョン)。そして、ロールプレイ全体の体験学習の振り返りや事例検討等を通して、カウンセラーとしての十分な姿勢や技能が身に付いた者は、試行カウンセリングに進み、学部学生の中でクライアント役について協力の承諾を得たものに対して、5回のカウンセリングを実施する。これらの演習及び実習により、カウンセラーの応答・姿勢、カウンセラーとしての自分の応答・姿勢の特徴や課題の把握、共感的理解に基づいたコミュニケーションなどの課題を学習する。			
授業の目的 臨床場面での相談活動に携わる準備として、自己理解を深めるとともに、カウンセラーとしての基本的姿勢と基本的技能を習得する。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. カウンセラーの応答・姿勢について重要な点や留意すべき点を説明することができる。(DPの「倫理観・社会的責任」) 2. 面接を振り返り、クライアントの心理ややりとりの流れを把握し、説明することができる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 3. 面接を振り返り、カウンセラーとしての自分の応答・姿勢の特徴や課題を把握し、説明することができる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 4. クライアントが「カウンセラーにわかってもらえている」、「続けて面接に来たい」と感じられるように、共感的理解に基づいたコミュニケーションを行うことができる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 5. 自分の心の動きに目を向けて、できるだけ正確に把握し、言語化することができる。(DPの「専門知識・理解」に対応)			
成績評価の方法 基礎的体験学習、カウンセリング・ロールプレイ、試行カウンセリング、事例検討への取り組み、及びそれらの発表・討議への取り組み(80%)、毎回の実習記録及びレポート(20%)にて評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 (担当: 山田俊介, 竹森元彦, 橋本忠行, 林智一, 坂中尚哉, 谷渕真也, 太田美里) オリエンテーションの後、自己理解を深めるための基礎的体験学習、カウンセリング・ロールプレイの演習を心理臨床相談室の面接室で実施し、その検討を行う(1グループ5人程度のグループ・スーパービジョン)。そして、ロールプレイ全体の体験学習の振り返りや事例検討等を通して、カウンセラーとしての十分な姿勢や技能が身に付いた者は、試行カウンセリングに進み、学部学生の中でクライアント役について協力の承諾を得たものに対して、5回のカウンセリングを実施する。			
第1回 オリエンテーション(大学院の学び、臨床心理基礎実習について)			

- 第2回 臨床心理基礎実習が目指すもの、ロールプレイの進め方(1)
- 第3回 ロールプレイの進め方(2)、応答技法
- 第4回 基礎的体験学習
- 第5回 カウンセリング・ロールプレイの実施と発表・検討 (1-1)
- 第6回 カウンセリング・ロールプレイの実施と発表・検討 (1-2)
- 第7回 カウンセリング・ロールプレイの実施と発表・検討 (1-3)
- 第8回 カウンセリング・ロールプレイの実施と発表・検討 (2-1)
- 第9回 カウンセリング・ロールプレイの実施と発表・検討 (2-2)
- 第10回 カウンセリング・ロールプレイの実施と発表・検討 (2-3)
- 第11回 カウンセリングの実際(ビデオ視聴)
- 第12回 カウンセリング・ロールプレイの実施と発表・検討 (3-1)
- 第13回 カウンセリング・ロールプレイの実施と発表・検討 (3-2)
- 第14回 カウンセリング・ロールプレイの実施と発表・検討 (3-3)
- 第15回 カウンセリング・ロールプレイの振り返り、傾聴について
- 第16回 カウンセリング・ロールプレイの実施と発表・検討 (4-1)
- 第17回 カウンセリング・ロールプレイの実施と発表・検討 (4-2)
- 第18回 カウンセリング・ロールプレイの実施と発表・検討 (4-3)
- 第19回 試行カウンセリングの説明、面談
- 第20回 面談、ロールプレイの振り返り
- 第21回 カウンセリング・ロールプレイの実施と発表・検討 (5-1)
- 第22回 カウンセリング・ロールプレイの実施と発表・検討 (5-2)
- 第23回 カウンセリング・ロールプレイの実施と発表・検討 (5-3)
- 第24回 試行カウンセリングの実施(1)
- 第25回 試行カウンセリングの実施(2)
- 第26回 相談室電話受付実習(1)
- 第27回 相談室電話受付実習(2)
- 第28回 相談室受付実習(1)
- 第29回 相談室受付実習(2)
- 第30回 相談室受付実習(3)

【授業及び学習の方法】

(1)オリエンテーション

臨床心理基礎実習の目的とすすめ方、カウンセリング・ロールプレイの進め方についての説明を行う。

(2)基礎的体験学習

大学院生同士のコミュニケーションを深め、自分の感情に目を向けるような体験とする。主な内容は、コラージュ制作体験やグループ箱庭等である。

(3)カウンセリング・ロールプレイの実施

カウンセリングの基本的応答やロールプレイのすすめ方の学習を行う。その後、院生同士によってクライアント役とカウンセラー役を、交互に役割を交代してロールプレイ実習を、心理臨床相談室の面接室にて実施する(面接時間は20分)。カウンセラー役とクライアント役それぞれ少なくとも3回のカウンセリング・ロールプレイを実施する。

(4)カウンセリング・ロールプレイの検討

1 グループ5人程度のグループ・スーパービジョンを受ける。その回の発表者が逐語録を起こした上で、考察も加えた発表資料を配布する。はじめに、録音されたやり取りを全員で聴く。その後、発表の際には、各院生は、面接の印象、やり取りの過程、クライアントの理解、姿勢や応答等について意見交換を行う。また、カウンセリング・ロールプレイを通して学んだことについてレポートを作成する。

(5)体験学習の振り返りや事例検討を通しての学習

ロールプレイ全体を通しての振り返り、カウンセリングに関係するビデオの視聴、公刊された事例の検討を通して、クライアント理解や関わりについての手掛かりを得る。

(6)試行カウンセリングの実施

試行カウンセリングとは、学部学生の中でクライアント役について協力の承諾を得たものに対して、5回のカウンセリングを心理臨床相談室等の面接室にて実施する。ロールプレイよりもより実践に近い形での実習となる。

実施の前に、カウンセラーとしての十分な姿勢や技能が身についたかどうかを授業担当者が確認する。その後、スーパーバイザーとなる教員と具体的な進め方について相談を行う。

試行カウンセリングを実施することが決まった院生は、クライアントに対して守秘義務、面接構造等について説明し、契約書に同意のサインをもらう。なお、試行カウンセリングの個別スーパービジョンは「面接技法演習」として行う。

(7)記録

各回の実習の記録は、所定の様式に記述したうえで、授業担当教員に提出し、指導を受ける。

この科目は全回対面授業で行います。なお状況によっては全てまたは一部の授業回の授業形態を遠隔へ変更する可能性がある。

【自学自習のためのアドバイス】

(1)オリエンテーション

実習の目的や方法について知り、自分自身の心理臨床家としての目標や目指すべき臨床家の姿を描くことが重要であ

る。ロールプレイを通して、自分のコミュニケーションの癖を知ったり、クライアントの気持ちに共感する上で、わき上がる自らの感情に目を向けることなどの重要性（カウンセラーとしての独自性）について知り、さらに、関連する図書を読み、学習する。

(2) 基礎的体験学習

コラージュ制作体験やグループ箱庭等、言葉によらないグループでのコミュニケーションをすることによって、自らの感情に目を向け、他の学生の言葉によらないコミュニケーションを見てどのような気持ちが生じるのか、内にわきあがる気持ちを言葉で伝えることの重要性などを感じ取り、関連する図書などを読み、学習する。

(3) カウンセリング・ロールプレイの実施と検討

カウンセラーとしてのロールプレイと、クライアントとしてのロールプレイの両方の経験と、また、それを通してのグループでの検討をすることで、カウンセラーとしてだけではなく、クライアント自身の気持ちにもなる。どのようなカウンセラーの言葉や姿勢に、クライアントが助けられるのか、気持ちを安心して話せるのかなどを、学習する。

(4) 試行カウンセリングの実施とスーパーヴィジョン

試行のカウンセリング（5回の連続したカウンセリング）と、そのスーパーヴィジョンの経験を通して、連続したカウンセリングによって、クライアントの訴えに、どのような変化が生じてくるのかを見ることが出来る。また、スーパーヴァイザーのカウンセラーとしてのかかわりや姿勢から、カウンセラーとはどうあるべきかを学ぶことができる。関連する図書などを読み、さらに学習する。

教科書・参考書等

礪幹八郎著 「試行カウンセリング」 誠信書房

オフィスアワー 水曜日12:00-13:00

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

発表者に対して、率直な意見や質問をする等、互いに学びあう姿勢が大切である。また、発表者は、発表についての質問や意見を授業終了後に十分に振り返ること。

臨床心理士受験資格を得るための必修科目である。

ナンバリングコード M3PSY-ACXM-40-Px1 授業科目名 (時間割コード: 971006) 臨床心理実習Ⅰ (心理実践実習Ⅲ (心理臨床事例検討実習Ⅱ)) Practice in Clinical Psychology I Practice in Clinical Psychology I	科目区分	時間割 前期月1~2	対象年次及び専攻 2~医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 ACXM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Px	単位数 1	
担当教員名 坂中 尚哉, 竹森 元彦, 橋本 忠行, 山田 俊介, 谷渕 真也, 長谷 綾子	関連授業科目	心理実践実習Ⅰ、Ⅱ	
	履修推奨科目	面接技法演習、臨床心理学実習Ⅱ	
学習時間	実習90分×2コマ×15回+自学自習 (準備学習 15時間 + 事後学習 15時間)		隔週
授業の概要 本研究科附属心理臨床相談室において、院生スタッフが担当する心理臨床面接やプレイセラピーの事例について検討する。事例提供者の発表素材に基づき、グループ・ディスカッション及びグループ・スーパーヴィジョン形式で、多面的かつ精密に検討していく。			
授業の目的 授業は、通年15回 (隔週) おこなう。まず事例提供者が事例の概要、見立て、心理療法の展開過程を提示し、さらに、担当者としてどのように考えどのように関わっていたかなどの主観的な読みを提示する。質疑応答やディスカッションを通して、心理臨床事例に関して理解を深めていく。同時に、セラピストとしての態度、関わり方等についても、各自の実践事例と関連づけながら、体得していく。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 事例検討を通して、事例に対するセラピストとしての倫理性の理解を深めることができる。(公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解) (DPの「専門知識・理解」, 「倫理観・社会的責任」に対応)。 2. クライエントの心に生じていること、セラピストの心に生じていること、面接関係や臨床場面に生じていること、理解を深めることができる。DPの「専門知識・理解」に対応)。 3. セラピスト自身の体験や理解のあり方への向き合い方と見直しの度合いを深めることができる。DPの「専門知識・理解」に対応)。 4. 参加者として、個々の事例に即して、自らの事例理解を見直そうとする姿勢の程度や、発表者がクライエントとの臨床体験に立ち戻って捉え直すことを促進するような関わり方の姿勢を持つことができる。DPの「専門知識・理解」に対応)。 5. 心理に関する支援を要する者等に関するコミュニケーション・心理検査・心理面接の知識の修得、ニーズの把握及び支援計画の作成について説明できる。DPの「専門知識・理解」に対応)。 			
成績評価の方法 発表や討議への取り組み・検討の内容 (50%)、最終レポート (50%) によって評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 (担当: 山田俊介, 竹森元彦, 橋本忠行, 坂中尚哉, 谷渕真也, 長谷綾子, 太田美里) 授業は、通年15回 (隔週) おこなう。まず事例提供者が事例の概要、見立て、心理療法の展開過程を提示し、さらに、担当者としてどのように考えどのように関わっていたかなどの主観的な読みを提示する。質疑応答やディスカッションを通して、心理臨床事例に関して理解を深めていく。同時に、セラピストとしての態度、関わり方等についても、各自の実践事例と関連づけながら、体得していく。			
第1回 オリエンテーション 第2回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (1) 第3回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (2) 第4回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (3)			

- 第5回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (4)
- 第6回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (5)
- 第7回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (6)
- 第8回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (7)
- 第9回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (8)
- 第10回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (9)
- 第11回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (10)
- 第12回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (11)
- 第13回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (12)
- 第14回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (13)
- 第15回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (14)

【授業及び学習の方法】

毎回、事例提供者のケースに基づき、討議をおこなう。グループ・ディスカッションならびにグループ・スーパービジョン形式を用いて、授業参加者の実践経験を踏まえた発言を活用しながら、担当ケースを多面的かつ精密に検討していく。そのような事例検討を通して、その事例のクライアントの心に生じていることへの理解やセラピストの心に生じていることへの理解、治療関係や臨床場面に生じていることへの理解を深める。各回のレポートを提出し教員がレポートの指導を行う。

心理臨床相談室で担当した実際の事例を通して検討するので、実習において知り得た個人の秘密の保持について、十分配慮する。

【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】

準備学習：発表者は相談室での面接事例の経過について、ケースカンファレンス書式を参考枠に発表資料として準備する（各回1時間、計15時間）。

事後学習：授業中の議論内容や教員からのコメントを振り返り、心理臨床に関する考察を深めるとともに、自分自身の心理臨床に必要な基本的態度への応用を考える（各回1時間、計15時間）。

教科書・参考書等

必要に応じて紹介する。

オフィスアワー 水曜日12:00-13:00

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

公認心理師受験資格及び臨床心理士受験資格を得るための必修科目である。

ナンバリングコード M3PSY-ACXM-40-Px1 授業科目名 (時間割コード: 971007) 臨床心理実習Ⅱ Practice in Clinical PsychologyⅡ Practice in Clinical PsychologyⅡ	科目区分	時間割 前期集中	対象年次及び専攻 2～医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 ACXM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Px	単位数 1	
担当教員名 竹森 元彦, 林 智一, 橋本 忠行, 山田 俊介, 野口 修司, 川人 潤子, 坂中尚哉, 谷渕 真也, 長谷 綾子	関連授業科目	心理実践実習Ⅰ、心理実践実習Ⅱ、心理実践実習Ⅲ	
	履修推奨科目	面接技法演習、「心理実践実習Ⅰ（ケースフォーミュレーション実習）」、「心理実践実習Ⅱ（心理臨床事例検討実習Ⅰ）」、臨床心理実習Ⅰ（心理実践実習Ⅲ（心理臨床事例検討実習Ⅱ））	
学習時間 実習90分×30回＋自学自習（準備学習 15時間＋事後学習 15時間）			
授業の概要 心理臨床相談室におけるケース担当実習の一部で、院生の担当しているケースに関する記録を基に個人スーパービジョンを行い、さまざまな心の問題の理解や臨床的対応の仕方を指導する。グループで事例を検討する「心理実践実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」や心理相談室等での心理臨床業務実習の「心理実践実習Ⅳ」と併せて、臨床現場での対応とその根拠となる心理学的理解との関係を実践的に指導する。			
授業の目的 相談室内の相談ケースを担当し、個人スーパービジョンを受けることを通して、ケースの理解の進め方、具体的な対応の仕方を習得するとともに、ケース担当者としての責任を果たす。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 相談を振り返り、クライアントの心理ややりとりの流れを把握し、説明することができる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 2. 相談を振り返り、カウンセラーとしての自分の応答・姿勢・行動がクライアントの語り・行動・気持ちに及ぼす影響について述べるができる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 3. クライアントが「カウンセラーにわかってもらえている、大切にされている」、「続けて相談に来たい」と感じられるように、クライアントに対して共感的理解に基づいたコミュニケーションを行うことができる。(DPの「専門知識・理解」,「倫理観・社会的責任」に対応) 4. スーパービジョンを通して得たクライアント理解や自己理解を、次回の相談への対応に生かすことができる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 5. 面接全体を通して、クライアントとの関わりを振り返り、カウンセラーとしてどのように関わったのか、どのような課題があるのかについて述べるができる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 6. 心理に関する支援を要する者等に関するコミュニケーション・心理検査・心理面接の知識と技能の修得、心理に関する支援を要する者等に関する理解とニーズの把握及び支援計画の作成ができる。(DPの「専門知識・理解」,「倫理観・社会的責任」に対応) 7. 公認心理師としての職業倫理及び法的義務を説明できる。(DPの「倫理観・社会的責任」に対応)			
成績評価の方法 担当したケースへの取り組みと面接記録（逐語）の作成（50%）、スーパービジョンへの取り組み（50%）にて、評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀（90点以上100点まで）到達目標を極めて高い水準で達成している。 優（80点以上90点未満）到達目標を高い水準で達成している。 良（70点以上80点未満）到達目標を標準的な水準で達成している。 可（60点以上70点未満）到達目標を最低限の水準で達成している。 不可（60点未満）到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 （担当：竹森元彦，林智一，橋本忠行，山田俊介，野口修司，坂中尚哉，谷渕真也，長谷綾子，太田美里） 具体的な進め方は、次の通りである。相談を始める準備として、心理療法の基本的な進め方、クライアントとの初めての出会い、関りを持つ上での留意点などについてスーパーバイザーの指導のもとに学習する。相談活動を実施して、各回ごとに面接記録を作成し、スーパーバイザーに個人スーパービジョンを受ける。相談活動とスーパービジョンを			

重ねる中で、クライアントをより正確により深く理解し、それに基づいたより適切な関わりが持てるようになることが目指される。相談終了後には、経過全体の振り返り・まとめを行う。

第1回 担当ケースに関する事前スーパービジョン

第2回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(1)

第3回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(2)

第4回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(3)

第5回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(4)

第6回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(5)

第7回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(6)

第8回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(7)

第9回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(8)

第10回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(9)

第11回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(10)

第12回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(11)

第13回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(12)

第14回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(13)

第15回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(14)

第16回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(15)

第17回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(16)

第18回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(17)

第19回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(18)

第20回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(19)

第21回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(20)

第22回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(21)

第23回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(22)

第24回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(23)

第25回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(24)

第26回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(25)

第27回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(26)

第28回 心理臨床相談室における臨床心理面接あるいは心理検査の実施及び面接記録の作成
1回ないし2回の面接ごとに面接記録に基づいた個人スーパービジョン(27)

第29回 面接過程全体に関する個人スーパーヴィジョン(1)

第30回 面接過程全体に関する個人スーパーヴィジョン(2)

【授業及び学習の方法】

心理臨床相談室の研修相談員として実際の相談ケースを担当するものである。そのため、心理臨床相談室の目的・役割を理解し、相談室の規則に従って活動する必要がある。クライアントとの相談について、面接記録を作成し個人スーパービジョンを受けることを通して、より望ましい援助を実現できるように努める。また、相談活動で知り得たク

クライアントの秘密を守るなど、クライアントの福祉を十分に尊重する。なお、より良い援助を行うためには、自身の心身の健康の保持も重要である。

【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】

準備学習：心理臨床相談室等での実習の経過のまとめや考察に必要な文献を講読する(各回30分，計15時間)。

事後学習：個人スーパービジョンの教員からのコメントを振り返り，臨床実践に関する考察を深めるとともに，次回のケースの方針を考える(各回30分，計15時間)。

教科書・参考書等

必要に応じて紹介する。

オフィスアワー 金曜日12:00-13:00

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

心理臨床相談室でケースを担当するためには「臨床心理基礎実習」「面接技法演習」を履修しておく必要がある。

相談ケースの担当にあたっては、クライアントの立場・利益を第一に考え、真剣で誠実な態度で臨むこと。

臨床心理士受験資格を得るための必修科目である。

ナンバリングコード M3PSY-ABXM-40-Lx2 授業科目名 (時間割コード: 971008) 心理学研究法特論 Special Studies in Research Methods of Psychology	科目区分	時間割 前期集中	対象年次及び専攻 医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 ABXM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 高田 純, 竹森 元彦, 谷渕 真也	関連授業科目		
	履修推奨科目 臨床心理学研究法特論		
学習時間 講義90分×15回+自学自習(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 「臨床心理学調査・研究」は、臨床心理士に求められる固有な専門業務の一つである。リサーチクエスションの立て方から論文文化までのプロセスで必要な知識と技術について講義し、先行研究の精読やディスカッションといった演習を行います。			
授業の目的 心理学研究法を学び、修士論文作成のための知識や能力を身につける。主な心理学研究法について理解し、心理学研究によって得られた成果を、適切に評価するなど身につけることによって、修士論文作成に関する基礎知識を学び、自身の研究計画を立てることができることを目標とする。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 主な心理学研究法について理解し、説明することができる(DPの「専門知識・理解」に対応)。 2. 心理学研究によって得られた成果を、適切に評価することができる(DPの「専門知識・理解」に対応)。 3. 修士論文作成に関する基礎知識を学び、自身の計画を立てることができる(DPの「専門知識・理解」と「研究能力・応用力」に対応)。			
成績評価の方法 ・担当したテーマについての発表やレジュメ 50% ・レポート 50%			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス			
【授業計画】 第1回 心理学研究とはなにか 第2回 心理学・臨床心理学と科学 第3回 研究計画とプロセス 第4回 論文検索と研究倫理 第5回 心理測定尺度の作成と使用 第6回 平均値の比較と相関分析 第7回 多変量解析 第8回 KJ法とテキストマイニング 第9回 グランデッドセオリーアプローチ① 理論 第10回 グランデッドセオリーアプローチ② インタビューの準備 第11回 グランデッドセオリーアプローチ③ データの分析 第12回 ライフラインとTEM分析 第13回 事例研究 第14回 量的研究と質的研究 第15回 まとめ 以上の計画は進捗状況、理解度によって変更することがある。			

【授業及び学習の方法】

事前に資料・文献を配布するので、受講生は各自分担しレジメを作成しておくこと。各講義で担当回について発表を行い、それに踏まえての教員と院生同士のディスカッションを行う。

第1～4回までは、研究の意義、プロセス、研究倫理といった概論であり、講義を行う。その疑問点や感想について発表する。第5～7回の量的研究については、論文の内容が理解できるよう講義を行う。加えて、実際のデータを用いて分析を行い、その解釈を行う。第8～13回の質的研究について、可能なものは講義内に実際に体験してもらうことで、良さや疑問点を明確にする。第14、15回では、院生それぞれの研究課題を発表してもらいながら、どのような研究手法を用いればよいか、ディスカッションを行う。

【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】

準備学習：心理学研究法に関する文献等を読んで内容、疑問点、意見をまとめておく。発表者はそれらを発表資料として準備する（各回2時間、計30時間）。

事後学習：授業中の議論内容や教員からのコメントを振り返り、研究法に関する考察を深めるとともに、自分自身の研究への応用を考える（各回2時間、計30時間）。

教科書・参考書等

講義中に指示する。

オフィスアワー 集中講義なので、担当教員と相談の上、昼休みや授業終了後の時間にて行う。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

各回担当者を決め、発表してもらいます。発表に対して全員でディスカッションを行います。積極的な参加を期待しています。

臨床心理士受験資格を得るための選択必修科目（A群）である。

ナンバリングコード M3PSY-ACDM-40-Lg2 授業科目名 (時間割コード: 971009) 教育臨床心理学特論 (教育分野に関する理論と支援の展開) Special Studies in Clinical psychology for Education (Support Theory and Applications in Educational Area) Special Studies in Clinical psychology for Education (Support Theory and Applications in Educational Area)	科目区分	時間割 後期水2	対象年次及び専攻 医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 ACDM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lg	単位数 2	
担当教員名 神原 憲治, 坂中 尚哉, 角 徳文	関連授業科目	心理実践実習B (福祉・教育実習)	
	履修推奨科目	臨床心理面接特論I 臨床心理面接特論II	
学習時間 授業90分×15回+自学自習 (準備学習 15時間 + 事後学習 15時間)			
授業の概要 大学における学生相談や大学附属の心理教育相談室、また小・中学校から幼稚園や高校にも広がりを見せるスクールカウンセラーなど、教育分野では心理支援者が広く活躍している。そこでは、要心理支援者の発達段階や教育現場の特性への理解が求められる。また、保護者や教職員、関係機関との協働も重要となる。さらに、滞日外国人児童への支援など、グローバルマインドも求められる。この授業では、公認心理師に必要な教育分野での理論と支援の実践について講義を行う。			
授業の目的 児童・生徒・学生など、要心理支援者の発達段階の特性を理解し、児童期・青年期に関する医学的知識を習得する。そして、教育現場の特性を踏まえた心理支援を行えるよう、理論と心理実践について学ぶ。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 教育分野に関連する法規や制度について説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 2. 要心理支援者の発達段階について説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 3. 児童期・青年期に好発する主要な疾患・障害について説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 4. 教育現場の特性や関連機関、関連職種について説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 5. 地域 (学校風土) の視点に立ち、心理的支援について説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 6. 教育分野に関わる公認心理師の実践について説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。			
成績評価の方法 発表や討議への取り組み (50%)、最終レポート (50%) によって評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス			
【授業計画】 第1回 インTRODクション 第2回 教育現場において生じる問題とその背景①—学習指導要領、法規、制度— 第3回 教育現場において生じる問題とその背景②—子どもの現状 (滞日外国人児童の現状と支援を含む: 地域のグローバル化による課題と心理的支援) — 第4回 教育現場において生じる問題とその背景③—教職員の現状— 第5回 教育現場における心理社会的課題と必要な支援①—学校不適応、滞日外国人児童の現状と支援: 地域のグローバル化による課題と心理的支援— 第6回 教育現場における心理社会的課題と必要な支援②—不登校— 第7回 教育現場における心理社会的課題と必要な支援③—いじめ— 第8回 教育現場における心理社会的課題と必要な支援④—保護者との連携— 第9回 教育現場における心理社会的課題と必要な支援⑤—教職員のメンタルヘルス— 第10回 児童期・青年期の精神医学 第11回 児童期・青年期の心身医学			

- 第12回 スクールカウンセリングの理論と実践①
第13回 スクールカウンセリングの理論と実践②
第14回 多職種連携—チーム学校—
第15回 全体を通してのまとめの議論

以上の計画については、進捗状況、内容の理解度などによって変更することがある。

【授業及び学習の方法】

第1回は、授業全体の進め方や各回のポイントについて概略を説明する。また、各回の発表の分担などを行う。
第2～4回は、教育現場において生じる問題とその背景（制度や現状）を3つの視点から議論して学びを深める。
第5～9回は、心理社会的課題と必要な支援の観点から、5つの課題について議論を通して学びを深める。
第10～11回は、児童期・青年期の精神医学と心身医学の観点から、児童期・青年期に好発する主要な疾患・障害と、心理的支援について学ぶ。
第12～13回は、以上の回での議論をふまえて、学校風土を踏まえたスクールカウンセリングの理論と実践について学びを深める。
第14回は、チーム学校概念と表裏性、チームにおけるスクールカウンセラーの姿勢などについて学ぶ。
第15回は、全体を通しての振り返りやまとめの議論を行う。

具体的な進め方としては、受講者による分担発表と、それに踏まえての教員と院生同士のディスカッション、教員によるレクチャーによる。院生自身が中心となって具体的な議論ができるように、発表者は、特に第2回～13回に関しては、事前に関連する論文などを調べてくること。また、事後は、受講者自身が、各課題の解決に向けての考え方や具体的な実践方法などに関心を持ち、調べること。
教育現場の現状と課題に応じた学校での心理的支援についての理解の程度や今後の学習上の課題などを見るために、総括のレポートを課す。

【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】

準備学習：学校心理臨床に関する事前に配布されている文献等を読んで内容、疑問点、意見をまとめておく。
発表者はそれらを発表資料として準備する（各回1時間、計15時間）。
事後学習：授業中の議論内容や教員からのコメントを振り返り、学校心理臨床に関する考察を深めるとともに、自分自身のスクールカウンセリングの多様性を理解するよう努める（各回1時間、計15時間）。

教科書・参考書等

本授業では、担当者が必要に応じて資料を配布する。

参考書：①増田健太郎（編著） 教育分野：理論と支援の展開（公認心理師分野別テキスト3） 創元社 ②山本智子（編著）「学校」を生きる人々のナラティブ（子どもと教師・スクールカウンセラー・保護者の心のずれ） ミネルヴァ書房③河合隼雄（編著）「不登校」金剛出版。そのほか、適宜紹介する。

オフィスアワー 水曜日12:00～13:00

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

公認心理師受験資格取得のための必修科目である。

臨床心理士受験資格を得るための選択必修科目（B群）である。

ナンバリングコード M3PSY-AXXM-40-Eg2 授業科目名 (時間割コード: 971010) 発達臨床心理学特論 Developmental clinical Psychology	科目区分	時間割 前期火2	対象年次及び専攻 医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 AXXM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Eg	単位数 2	
担当教員名 林 智一	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 演習90分×15回+自学自習(準備学習30時間+事後学習30時間)			
授業の概要 発達臨床心理学とは、誕生から死に至る人生の過程に関わる臨床心理学のことである。臨床心理学と発達心理学の協働(コラボレーション)の新たな枠組みでもありとされている(下山, 2001)。 本授業では、人生の各時期のこのころの主要テーマについて、上記の観点から考察する。発達臨床心理学的観点は、心理臨床家をを目指す人にとっては、広い領域で求められる、不可欠のものである。また、受講者自身のこのころの発達や人生の過程を考える際の指針ともなる。 受講者による討議をもとに授業を進めるので、受講者からの積極的な質問・意見を期待する。そのためには、必ず予習をしておく必要がある。また、レポートを執筆し、ピアレビューを実施する。			
授業の目的 各発達段階において優勢となる心理的危機や問題と、それらに対する心理的援助について理解することを目的とする。受講者間および受講者と教員の間でテキストをベースとした討論を行い、基本的理解の深化と定着をめざす。さらにレポート執筆を通して受講者自身の発達臨床心理学観を整理して、他者に適切に説明できるようになってもらいたい。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 発達段階のこのころの一般的特徴を説明することができる(DPの「専門知識・理解」に対応)。 2. 発達臨床心理学について、自身の理解を整理して一定の書式に則ったレポートを執筆できる(DPの「専門知識・理解」に対応)。			
成績評価の方法 ・授業テーマについての討論内容 50% ・最終レポート 50%			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 第1回 教員によるミニレクチャー、受講者間の討論によるテーマの選定 第2回 総論—ライフサイクルと家族 第3回 胎児期 第4回 乳児期 第5回 幼児期 第6回 児童期 第7回 思春期 第8回 青年期後期と若い成人期 第9回 中年期 第10回 老年期—老いと死をめぐって 第11回 死にゆく人の心理過程 第12回 女性のライフサイクル 第13回 まとめ 第14回 レポートの発表1			

第15回 レポートの発表2

【授業および学習の方法】

第1回 教員より発達臨床心理学に関するミニレクチャーを行う。その後、授業で扱うテキストの章を受講者間の討論により選定する（上記授業計画第2回～第12回は、テキストの章を示している。ここから6章を選定し、各章につき授業2回を行う予定である）。

第2回～第13回は、受講者間および教員との各テーマについての討論とする。テキスト以外の文献を使用することもありうるので、その際には教員より指示する。

第14回・第15回は、受講者各自で1つのテーマを選択し、レポートを執筆したうえで、発表を行う。なお、レポートの表記法、執筆法については、教科書『レポートの組み立て方』を各自で精読し、学修しておくこと。

受講者による討論をもとに授業を進めるので、受講者からの積極的な質問・意見・コメントを期待する。そのためには、必ず予習をしておく必要がある。

【自学自習のためのアドバイス】

各回のテキストの該当章を予習をしてください。不明の概念や用語については、テキストの引用文献や心理学事典、心理臨床大事典、精神分析事典、精神医学事典などを利用して調べてください（事前学習2時間×15回＝30時間）。また、授業の復習はもちろん、討論の際にわからなかった点などは、授業後に調べておいてください（事後学習2時間×15回＝30時間）。

【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】

準備学習：テキスト等を読んで内容、疑問点、意見、コメントをまとめておく（各回2時間、計30時間）。

事後学習：授業中の議論内容や教員からのコメントを振り返り、授業テーマに関する考察を深めるとともに、自分自身の研究・心理臨床への応用を考える（各回2時間、計30時間）。

教科書・参考書等

- ・小川捷之・鏑 幹一郎・斎藤久美子（編集） 臨床心理学大系第3巻ライフサイクル 金子書房(Kindle版8800円)
- ・木下是雄 レポートの組み立て方 筑摩書房（780円）

参考書等

- ・国語辞典（電子辞書でも可）
- ・心理学事典（平凡社、誠信書房など）
- ・心理臨床大事典（培風館）
- ・精神分析事典（岩崎学術出版、新曜社など）
- ・現代精神医学事典（弘文堂）

オフィスアワー 水曜日16:20-17:00

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

臨床心理士受験資格を得るための選択必修科目（B群）である。

ナンバリングコード M3PSY-ACDM-40-Lx2 授業科目名 (時間割コード: 971011) 家族・集団臨床心理学特論(家族関係・ 集団・地域社会における心理支援に関する 理論と実践) Advanced Clinical Psychology of Family and Group(Support Theory and Practice for Family, Group, and Community)	科目区分	時間割 後期月3	対象年次及び専攻 医学系研究科修士課 程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 ACDM	対象学生・特定プロ グラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 野口 修司	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回＋自学自習(事前学習30時間＋事後学習30時間)			
授業の概要 臨床心理学の実践において、個人に対する心理的な援助だけではなく、不登校や引きこもり、子どもの非行や夫婦の不和といった家族に関する問題や社会における人間関係の問題等、複数人が関与する問題についても取り扱わなければならない場面が多く存在する。また、近年では滞日外国人家族への支援といったグローバルな視点も求められる。本授業では、そのような複数人が関与する問題に対するアプローチとして発展していった家族療法およびブリーフセラピーを主軸としながら、家族関係や集団、地域社会においてどのように心理支援を行っていけば良いのかについて紹介していく。			
授業の目的 具体的には、心理的な問題に対してシステミックにアプローチをしていく家族療法およびブリーフセラピーに関する諸理論および技法について事例を交えながら学習し、加えてロールプレイを用いることで実践的なトレーニングについても行っていく。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 家族・集団・地域社会における諸問題について説明することができる (DPの「グローバルマインド」に対応)。 2. 家族関係等集団の関係性に焦点を当てた心理支援の理論と方法について説明することができる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 3. 地域社会や集団・組織に働きかける心理学的援助に関する理論と方法について説明することができる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 4. 心理に関する相談、助言、指導等への上記2及び3の応用について説明することができる (DPの「倫理観・社会的責任」に対応)。			
成績評価の方法 討議やロールプレイへの取り組み (50%)、最終レポート (50%) により評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス			
【授業計画】 第1回 インTRODクション: 家族に関わる問題 (虐待 (児童・高齢者)・DV・非行・ひきこもり・滞日外国人家族) について 第2回 「システム」と「コミュニケーション」 第3回 家族療法およびブリーフセラピー誕生の歴史 第4回 家族療法およびブリーフセラピーに関する諸理論と技法について ①: MR I アプローチ 第5回 家族療法およびブリーフセラピーに関する諸理論と技法について ②: 解決志向アプローチ 第6回 家族療法およびブリーフセラピーに関する諸理論と技法について ③: 構造的アプローチ 第7回 熟練者のロールプレイから学ぶ (1): MR I アプローチに基づいて 第8回 熟練者のロールプレイから学ぶ (2): 解決志向アプローチに基づいて 第9回 熟練者のロールプレイから学ぶ (3): 構造的アプローチに基づいて 第10回 家族療法およびブリーフセラピーに基づいたロールプレイ ①: 個人面接 第11回 家族療法およびブリーフセラピーに基づいたロールプレイ ②: 個人面接 (2回目) 第12回 家族療法およびブリーフセラピーに基づいたロールプレイ ③: チーム面接 第13回 家族療法およびブリーフセラピーに基づいたロールプレイ ④: チーム面接 (2回目) 第14回 家族療法およびブリーフセラピーに基づいたロールプレイ ⑤: 合同面接			

第15回 家族療法およびブリーフセラピーに基づいたロールプレイ ⑤：合同面接（2回目）

【授業及び学習の方法】

第1回～第6回については講義形式で行う。

第7回～第9回についてはロールプレイの動画を視聴し、グループによるディスカッションを行う。

第10回～第15回についてはグループでロールプレイを行う。

第15回時に本授業内で取り扱った内容をテーマとした最終レポートを課題とする。

【自学自習のためのアドバイス】

第1回～第9回 各回のテーマについて予習（各回2時間程度の事前学習）をし、それを踏まえて授業の内容を確認する。また、授業の後には復習（各回2時間程度の事後学習）をすることで、内容をしっかりと理解する。（4時間×9回）

第10回～第15回 各回のテーマについて予習（各回2時間程度の事前学習）をし、それを踏まえて授業中のロールプレイに反映させる。また、授業の後には復習（各回2時間程度の事後学習）をすることで、改善点について考察する。（4時間×6回）

教科書・参考書等

参考書等については、授業中に適宜紹介する。

オフィスアワー 月曜日14:30-16:10

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

実践的なトレーニングとして、事例検討やロールプレイの繰り返しはとても重要です。授業中に積極的に取り組むことはもちろんですが、授業を入り口としてそれ以外の時間でどれだけ自主的に学習できるかがとても重要です。

- ・公認心理師受験資格取得のための必修科目である。
- ・臨床心理士受験資格を得るための選択必修科目（C群）である。

ナンバリングコード M3PSY-ACDM-40-Lx2 授業科目名 (時間割コード: 971012) 産業・労働心理学特論 (産業・労働分野に関する理論と支援の展開) Advanced Psychology of Industry and Work Area (Support Theory and Applications in Industry and Work Area)	科目区分	時間割 前期月3	対象年次及び専攻 2～医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 ACDM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 野口 修司, 角 徳文, 神原 憲治	関連授業科目	産業・組織心理学	
	履修推奨科目	産業・組織心理学	
学習時間 講義・演習90分×15回＋自学自習 (事前学習30時間＋事後学習30時間)			
授業の概要 近年、職場における業務負担や人間関係のストレスによるうつ病の発症および自殺の増加に伴い、産業・労働分野における臨床心理学の重要性が高まっている。産業・労働分野における心理支援には、問題を抱えた個人へのアプローチに加えて、職場という組織・集団の視点を踏まえたシステム的なアプローチが不可欠となる。また、必要に応じて産業医といった関係者との連携が非常に重要となってくる。加えて、近年では外国人労働者の雇用実態と就業支援など、グローバルな視点が求められる。本授業では、個人およびシステム的なアプローチの考え方に基づき、産業・労働分野における心理支援について紹介していく。			
授業の目的 具体的には、産業・労働分野におけるストレスやキャリアといった基礎的な理論について学び、さらには心理的な問題に対してシステム的にアプローチをどのように活用していくのかについて動画を交えながら学習し、ディスカッションしていく。加えて、産業・労働分野における精神疾患や産業医の業務といった医学的知識についても学ぶ。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 産業・労働分野において起こりうる諸問題について、説明することができる (DPの「グローバルマインド」に対応)。 2. 産業・労働分野におけるシステム的・アプローチについて説明することができる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 3. システム的・アプローチに基づいた心理援助を実践することができる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 4. 産業・労働分野に関わる公認心理師の実践について説明することができる (DPの「倫理観・社会的責任」に対応)。			
成績評価の方法 討議への取り組み (50%)、最終レポート (50%) により評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 第1回 インTRODクション：産業心理学とは 第2回 産業・労働分野における諸問題 (香川県内の外国人労働者に関するものも含む) について 第3回 産業・労働分野における精神疾患について 第4回 産業医の業務とストレスチェック制度について 第5回 職場のストレス理論 第6回 キャリア理論 (1) 第7回 キャリア理論 (2) 第8回 産業領域におけるカウンセリングの実際 第9回 産業・労働分野におけるシステム的・アプローチ ①：基礎理論 第10回 産業・労働分野におけるシステム的・アプローチ ②：関係者へのコンサルテーション 第11回 産業・労働分野におけるシステム的・アプローチ ③：当事者へのカウンセリング 第12回 産業・労働分野におけるシステム的・アプローチ ④：関係者へのコンサルテーション (2回目) 第13回 産業・労働分野におけるシステム的・アプローチ ⑤：当事者へのカウンセリング (2回目)			

第14回 産業・労働分野におけるシステミック・アプローチ ⑥：合同面接
第15回 振り返り

【授業および学習の方法】

第1回～第8回については講義形式で行う。
第9回～第14回については動画を視聴し、グループによるディスカッションを行う。
第15回時に本授業内で取り扱った内容をテーマとした最終レポートを課題とする。

【自学自習のためのアドバイス】

各回のテーマについて予習（各回2時間程度の事前学習）をし、それを踏まえて授業の内容を確認する。また、授業の後には復習（各回2時間程度の事後学習）をすることで、内容をしっかりと理解する。（4時間×15回）

教科書・参考書等

参考書等については、授業中に適宜紹介する。

オフィスアワー 月曜日12:00-13:00

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

授業中に積極的に取り組むことはもちろんですが、授業を入り口としてそれ以外の時間でどれだけ自主的に学習できるかが重要です。

- ・公認心理師受験資格取得のための必修科目である。
- ・臨床心理士受験資格を得るための選択必修科目（C群）である。

ナンバリングコード M3PSY-ACXM-40-Lx2 授業科目名 (時間割コード: 971013) 犯罪心理学特論 (司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開) Special Studies in Criminal Psychology (Support Theory and Applications in Forensics and Criminology Area) Special Studies in Criminal Psychology (Support Theory and Applications in Forensics and Criminology Area)	科目区分	時間割 前期集中	対象年次及び専攻 2～医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 ACXM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 黒澤 良輔, 竹森 元彦, 坂中 尚哉	関連授業科目	家族・集団臨床心理学特論 (家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践)	
	履修推奨科目	臨床心理面接特論I 臨床心理面接特論II	
学習時間 講義・演習×15回+自学自習 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 司法・犯罪分野においては、犯罪や非行をした者について、犯罪や非行に至る原因や心理の分析、再犯・再非行のリスク評価、矯正・更生のための指導・助言、処遇プログラムの提供等が行われる。それらの基盤となる様々な理論と支援の展開について、講義・演習形式で学ぶ。			
授業の目的 公認心理師・臨床心理士として必要な司法・犯罪心理学とその関連領域についての知識を習得し、理解する。司法・犯罪分野においては、当事者が必ずしも援助を求めているという状況で信頼関係を築く必要があることも多い。また家事事件においては、当事者や子どもへの中立的な立場での関与も必要である。そのために必要な心理的評価や当事者等との関係のつくりかた、さらに支援の展開を学ぶ。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 犯罪、非行、犯罪被害及び家事事件についての基本的事項を概説できる。(DPの「専門知識・理解」に対応)。 2. 司法・犯罪分野における問題に対して必要な心理に関する支援について説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 3. 上記を踏まえ、司法・犯罪分野に関わる公認心理師の実践を十分に理解することができる (DPの「専門知識・理解」に対応)。			
成績評価の方法 担当したテーマについての発表やレジュメ (50%)、最終レポート (50%) で評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス			
【授業計画】 講義・演習形式で行われる。 第1回 オリエンテーション 犯罪心理学について総括的レクチャーを含んだ教員の紹介、発表分担など 第2回 司法・犯罪分野での心理的支援に関わる制度 第3回 犯罪心理学の主な理論1 第4回 犯罪心理学の主な理論2 第5回 司法・犯罪分野での心理的支援とその方法1 第6回 司法・犯罪分野での心理的支援とその方法2 第7回 少年事件の手続きの流れについて 第8回 家庭裁判所での調査と処遇 1 第9回 家庭裁判所での調査と処遇 2 第10回 被害者支援の実際 1 第11回 被害者支援の実際 2 第12回 司法と医療の接点 (心神喪失者等医療観察法) 1 第13回 司法と医療の接点 (心神喪失者等医療観察法) 2			

- 第14回 司法・犯罪分野に関する事例研究 1
第15回 司法・犯罪分野に関する事例研究 2

以上の計画については、進捗状況、内容の理解度などによって変更することがある。

【授業及び学習の方法】

第1回は、授業全体の進め方や各回のポイントについて概略を説明する。また、各回の発表の分担などを行う。
第2回は、司法・犯罪分野での心理的支援に関わる制度・施設・現状等について、講義形式で行う。
第3～4回は、犯罪心理学の主な理論を通して、犯罪心理学の考え方やアプローチについて、講義形式で行う。
第5～6回は、司法・犯罪心理学での心理的な支援とその方法について、具体的な施設別の事例を通して学ぶ。
第7回は、少年事件についての現状と課題、心理的支援について、講義形式で行う。
第8～9回は、家庭裁判所での調査と処遇について、具体的な事例を通して学ぶ。
第10～11回は、被害者支援の実際について、具体的な事例を通して議論を通して学ぶ。
第12～13回は、司法と医療の接点について、心身喪失者等医療観察法をとりあげて、講義形式で学ぶ。
第14～15回は、司法・犯罪分野に関する事例検討を通して、各施設における心理的支援の現状と課題を学ぶ。

具体的な進め方としては、受講者による分担発表と、それを踏まえての教員と院生同士のディスカッション、教員によるレクチャーによる。院生自身が中心となって具体的な議論ができるように、発表者は、特に第5回～6回、第14～15回に関しては、事前に関連する論文などを調べてくること。また、事後は、受講者自身が、各課題の解決に向けての考え方や具体的な実践方法などに関心をもち、調べること。

司法・犯罪分野に関する現状と課題に応じた心理的支援についての理解の程度や今後の学習上の課題などを見るために、総括のレポートを課す。

受講者による分担発表と、それに踏まえての教員と院生同士のディスカッション、教員によるレクチャーによる。事例研究については、具体的な事例をもとに議論する。

【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】

準備学習：文献等を読んで内容、疑問点、意見をまとめておく。発表者はそれらを発表資料として準備する（各回1時間、計30時間）。

事後学習：授業中の議論内容や教員からのコメントを振り返り、犯罪心理臨床に関する考察を深めるとともに、自分自身の研究への応用を考える（各回1時間、計30時間）。

教科書・参考書等

教科書・参考書等を特別には定めませんが、担当教員が適宜紹介する。

オフィスアワー 集中講義なので、担当教員と相談の上、昼休みや授業終了後の時間にて行う。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

公認心理師受験資格を得るための必修科目である。

臨床心理士受験資格を得るための選択必修科目（C群）である。

ナンバリングコード M3PSY-ACDM-40-Lx2 授業科目名 (時間割コード: 971014) 福祉心理学特論 (福祉分野に関する理論と支援の展開) Special Studies in Welfare and Clinical Psychology (Support Theory and Applications in Social Welfare Area)	科目区分	時間割 前期集中	対象年次及び専攻 2～医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 ACDM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 四方 克尚, 竹森 元彦	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 授業90分×15回+自学自習 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 人は生きていく中で、時に困難を抱えたり様々な障害に見舞われたりすることもある。それらの問題を受け止め、解決したり緩和したりする社会制度や福祉サービス、相互扶助などのシステムが求められる。福祉に関わる機関やシステム、地域福祉などにおいて、専門的な心理支援者としての公認心理師の役割が今後ますます期待される。また、滞日外国人やその児童への社会福祉の観点からの支援など、グローバルマインドも求められる。			
授業の目的 福祉分野には多様な職種が関わっている。他職種から、連携の対象として公認心理師にまず求められるのは、心理的支援に関する専門性である。さらに、関連する法規や制度に関する知識も不可欠である。本科目では、これらの習得を目的とする。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 福祉分野に関連する法規や制度について説明できる。 2. 福祉分野での主要な心理支援者と想定される児童、高齢者、障害者（児）などの心理特性について説明できる。 3. 福祉分野に関わる公認心理師の実践について説明することができる。 4. 福祉分野における地域社会のグローバル化の現状と課題、心理的支援について説明できる。			
成績評価の方法 ・担当したテーマについての発表やレジュメ (50%) ・最終レポート(50%)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス			
【授業計画】 1、 講義概要 事例検討 2、 社会福祉について 事例検討 3、 医療福祉について 事例検討 映像視聴 4、 傾聴について 事例検討 5、 高齢者福祉について・介護保険について 事例検討 6、 社会福祉の歴史について 事例検討 7、 クレーム対応について 事例検討 映像視聴 8、 施設について 事例検討 9、 社会福祉の思想について・児童福祉について 事例検討 10、 成年後見制度について 事例検討 映像視聴 11、 障がい者福祉について 事例検討 12、 社会福祉のシステムについて 事例検討 13、 地域福祉について 事例検討 映像視聴 14、 福祉心理学まとめ 事例検討まとめ 15、 総括 最終レポート			

【授業及び学習の方法】

受講者による分担発表と、それに踏まえての教員と院生同士のディスカッション、教員によるレクチャーによる。そのため、発表のための事前準備を早めに行う必要がある。また、授業で活発な質疑応答を行うためには、発表者だけでなく、受講者がテキストの予習をしていくことが必須となる。発表はもちろん、その後のレポート課題でも、単なるテキストの要約ではなく、そのテーマに関して自分自身がどう感じ、何を考えたかが問われる。そのため、テキストの学修にとどまらず、福祉問題などの報道に日頃から関心を持って接することが求められる。

【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】

自学自習（準備学習 30時間 + 事後学習 30時間）

教科書・参考書等

片岡玲子・米田弘枝（編著） 福祉分野：理論と支援の展開（公認心理師分野別テキスト2） 創元社

オフィスアワー 集中講義なので、担当教員と相談の上、昼休みや授業終了後の時間にて行う。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

公認心理師受験資格のための必修科目である。

臨床心理士受験資格を得るための選択必修科目（D群）である。

ナンバリングコード M3PSY-ACXM-40-Lx2 授業科目名 (時間割コード: 971015) 精神医療における心理支援 (保健医療分野に関する理論と支援の展開) Neuropsychiatry	科目区分	時間割 前期火3	対象年次及び専攻 医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 ACXM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 角 徳文	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義90分×15回+自学自習 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 精神疾患に含まれるものは多岐にわたるので本講義では、主にDSMもしくはICD(疾病及び関連保健問題の国際統計分類)に基づいたカテゴリーを扱うこととする。認知症や器質性・症候性精神障害 (F0)、アルコールをはじめとする薬物関連障害 (F1)、統合失調症 (F2)、躁うつ病 (F3)、神経症性障害 (F4)、摂食障害 (F5)、パーソナリティ障害 (F6)、知的障害 (F7)、発達障害(F8)、多動性障害など(F9)、てんかん (G40-41)、睡眠障害 (G47) などが挙げられる。これらの疾患は、心理学的要因、社会的要因、そして生物学的要因から病態を理解した上で、心理専門職としての支援方法を学ぶことになる。 本講座では、そのうち生物学的な病態の解明や治療法の開発をおこなう生物学的精神医学について講義する。			
授業の目的 各種精神疾患の要因、特に生物学的な成因を理解する。 各疾患に対する薬物療法、心理支援について理解する。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 主たる精神障害の疫学、症状、治療法について説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 2. 各障害に対する心理支援法について具体例とともに説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 3. 精神障害の支援についての多職種協働についてその意義や具体的な方法を説明できる (DPの「倫理観・社会的責任」に対応)。 4. 保健医療分野に関わる公認心理師の実践について説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。			
成績評価の方法 討議への取り組み (50%)、最終レポート (50%) により評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス			
【授業計画】 授業は主に液晶プロジェクター、もしくはホワイトボードを用いた講義形式で行う。 第1回：精神医学の概観 第2回：精神症候学 第3回：統合失調症とその類縁疾患 第4回：感情障害 第5回：不安障害、ストレス観覧障害、強迫性障害など (1) 第6回：不安障害、ストレス観覧障害、強迫性障害など (2) 第7回：摂食障害、睡眠障害、リエゾン精神医学など (1) 第8回：摂食障害、睡眠障害、リエゾン精神医学など (2) 第9回：器質性障害やてんかんなど			

- 第10回：物質誘発性精神障害及び関連障害
- 第11回：精神遅滞、情緒障害など
- 第12回：発達障害、パーソナリティ障害など
- 第13回：認知症
- 第14回：治療、薬物療法など
- 第15回：精神医療に関連する法令など

以上の計画に関しては進捗状況、内容の理解度等によって変更することがある。

【授業及び学習の方法】

第1回は総論であり、第2回以降は各障害の疫学、発症要因、治療等を主に学ぶ。

【自学自習に関するアドバイス】

各回のテーマについて予習（各回2時間、計30時間）をし、それを踏まえて授業の内容を確認する。授業の後には復習（各回2時間、計30時間）をすることで、理解を深める。

教科書・参考書等

医学生も使用するような精神医学の教科書の一つ用意してもらえると理解の手助けになると思います。さらに余裕があれば、DSM-5（精神障害の診断・統計マニュアル第5版）簡易版、ICD-10精神および行動の障害（医学書院）なども参考になります。

オフィスアワー 火曜日 10時から12時（基礎臨床研究棟）（基礎臨床研究棟）

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

公認心理師受験資格のための必修科目である。

臨床心理士受験資格を得るための選択必修科目（D群）である。

ナンバリングコード M3PSY-ACXM-40-Lx2 授業科目名 (時間割コード: 971016) 心身医学と心理支援 (保健医療分野に関する理論と支援の展開) Psychosomatic Medicine	科目区分	時間割 後期月4	対象年次及び専攻 医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 ACXM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 神原 憲治	関連授業科目	心理実践実習D (身体領域病院実習)	
	履修推奨科目		
学習時間 講義90分×15回+自学自習(事前学習30時間+事後学習30時間)			
授業の概要 心身医学は心身相関 (心理と身体の関係) を基本概念とした医学であり、医療に適用した心療内科、疾患としての心身症やストレス関連疾患の基盤になる医学である。本科目では、心身医学の概念、心身相関の生理学、心身相関の評価とストレス学、心身症の病態及び疾患論、心療内科学及びその治療論について、心理支援との関連を踏まえながら概説する。また、症例検討や体験学習を交えて、実践的な理解を目指す。			
授業の目的 医療、産業、教育等の現場において、ストレス関連疾患及び心身症は増加の傾向にあり、心理臨床において心身医学の基本的知識は必須のものとなっている。また、社会的意義が大きい生活習慣病においても、その心身症としての側面が問題となっている。 それを踏まえて本科目では、心身医学の基本概念、心身相関、ストレスと疾患の関連機序などの基礎的概念の理解と臨床的側面、心身相関の研究の現状と方法等について、心理支援において必要な心身医学の知識と実践的な理解を深めることを目的とする。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 心身医学、心身症、心療内科の定義について説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 2. 心身症と他の精神疾患の違いについて説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 3. 心身相関の基礎的概念やその生理機序について例を用いて説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 4. 心身症の病態について説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 5. 代表的な心身症と身体症状について、例を挙げて説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 6. ストレス関連疾患、機能的な身体疾患について概説できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 7. ストレスの身体への影響及びストレス反応について説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 8. 心療内科臨床の概要と心理支援との関係について説明できる (DPの「専門知識・理解」「倫理観・社会的責任」に対応)。 9. 保健医療分野に関わる公認心理師の実践について説明できる (DPの「専門知識・理解」「倫理観・社会的責任」に対応)。			
成績評価の方法 ミニレポート、体験学習やグループ学習への取り組み50%、期末テスト50%にて評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 第1回 心身医学総論① (心身医学、心身症、心療内科とは) 第2回 心身医学総論② (心身医学の基礎、大脳辺縁系と自律神経系) 第3回 心身医学総論③ (心身相関の精神生理学的体験学習) 第4回 心身症病態論① (情動理論と身体論) 第5回 心身症病態論② (応用精神生理学と心身医学) 第6回 心身症病態論③ (心身症の病態とバイオフィードバック) 第7回 ストレス学① (ストレスとホメオスタシス)			

- 第8回 ストレス学②（内受容感覚と心身の気づき）
- 第9回 ストレス学③（生理及び心理的ストレス反応）
- 第10回 疾患論①（代表的な心身症と身体症状（1））
- 第11回 疾患論②（代表的な心身症と身体症状（2））
- 第12回 疾患論③（機能性身体症候群とストレス関連疾患）
- 第13回 治療論と心療内科学①（心療内科における心理支援）
- 第14回 治療論と心療内科学②（心身医学的評価とアプローチ）
- 第15回 総括

【授業及び学習の方法】

講義は、プリント、スライド、板書を用いて、教科書を参照しながら行う。講義に加えて、心身相関の病態を可視化して体験できる応用精神生理学（バイオフィードバック）システムを用いた学習を適宜織り交ぜ、概念だけでなく体験的な理解を目指す。また、関連する臨床的なケースを提示し、その検討を併せて行う。

第1-3回は心身医学の総論的概念を学習する。第1-2回は講義形式で行い、第3回は講義に加えて、応用精神生理学システムを用いて心身相関を可視化する体験的学習を行う。第3回までに参考図書「バイオフィードバックとリラクゼーション法」のバイオフィードバックについての章を予習しておくこと。

第4-6回は心身症の病態論を学習する。第4-5回は講義形式で行い、第6回は講義に加えて、応用精神生理学システムを用いたバイオフィードバックの体験的学習を行う。

第7-9回はストレス学について学習する。第7-8回は講義形式で行い、第9回は講義に加えて、応用精神生理学システムを用いて生理的ストレス反応についての体験的学習を行う。

第10-12回は心身医学の疾患論について学習する。主として講義形式で行い、具体的なケースの検討をグループ学習形式で学習する。

第13-14回は心身医学及び心療内科学における評価、治療的アプローチ、及びその心理支援との関係について、講義及びグループ学習形式で学習し、第15回は講義及び質疑応答形式で全体を総括する。

以上の計画に関しては、進捗状況、内容の理解度等によって変更することがある。

【自学自習のためのアドバイス】

事前学習（各回1時間以上、計30時間）

- ・第1回，第2回 教科書の「II 心身医学の基礎」の部分进行学习しておく。
- ・第3回，第5回，第6回 参考書③の「バイオフィードバック」についての章、参考書⑤を中心に学習して概要を理解しておく。
- ・第4回，第7-9回 参考書④を中心に学習しておく。
- ・第10-14回 教科書の「心身症各論」を中心に予習を行う。

◎ほぼ毎回ケース検討を行うので、提示されたケースについては参考書等で事前に学習しておき、担当者はプレゼンテーションの準備も併せて行う。

事後学習（各回1時間以上、計30時間）

授業中の議論内容や教員からのコメントを振り返り、心理支援や研究法に関する考察を深めるとともに、自分自身の心理支援や研究への応用を考える。

教科書・参考書等

<教科書>

心身医学標準テキスト 第3版，久保千春編，医学書院，2009（9200円+税）

<参考書>

①心身医学用語事典 第3版【電子版】日本心身医学会用語委員会/日本心療内科学会学術企画委員会（編），三輪書店，2020

②心療内科学，日本心療内科学会（編），朝倉書店，2022

③バイオフィードバックとリラクゼーション法，竹林直紀・神原憲治・志田有子，金芳堂，2011

④ストレスの肖像 環境と生命の対話，林峻一郎，中公新書，1993

⑤生理心理学と精神生理学，堀忠雄・小崎久記監，北大路書房，2017

オフィスアワー 原則として火曜日15:00-16:00。その他、アポイントメントにより対応します。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

公認心理師受験資格のための必修科目である。

臨床心理士受験資格を得るための選択必修科目（D群）である。

ナンバリングコード M3PSY-ACXM-40-Ex2 授業科目名 (時間割コード: 971017) 面接技法演習 Seminar in Clinical Interviewing Seminar in Clinical Interviewing	科目区分	時間割 後期集中	対象年次及び専攻 医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 ACXM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Ex	単位数 2	
担当教員名 山田 俊介, 竹森 元彦, 橋本 忠行, 林 智一, 野口 修司, 川人 潤子, 坂中 尚哉, 谷渕 真也, 長谷 綾子	関連授業科目	臨床心理基礎実習、臨床心理実習Ⅱ	
	履修推奨科目	臨床心理学特論Ⅰ、臨床心理学特論Ⅱ、臨床心理面接特論Ⅱ	
学習時間 講義90分×15回+自学自習(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 『臨床心理基礎実習』における、試行カウンセリングのスーパーヴィジョンに関する科目である。面接技法演習(試行カウンセリングのスーパーヴィジョン)とは次のような過程を踏む。まず、スーパーバイザーである教員が院生と試行カウンセリングに関する事前の打合せを行う。試行カウンセリングの準備として、対象者(学部生の協力者)への連絡の取り方、打合せの仕方・契約の仕方、実施上の留意点などについてスーパーバイザーが指導する。院生が試行カウンセリングを実施して、各回ごとに面接記録を作成し、スーパーバイザーが院生に対して個人スーパーヴィジョンを行う。また、試行カウンセリング終了後には、面接過程全体の振り返り・まとめを行う。			
授業の目的 試行カウンセリングにおいて、5回の面接のそれぞれの回の中で、クライアントの心理の理解と、カウンセラーとしての自分のコミュニケーションの在り方を学ぶ。また、カウンセリングの契約、始まり方、終わり方などの基本的な進め方・留意点を修得する。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 面接を振り返り、クライアントの心理ややりとりの流れを把握し、説明することができる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 2. 面接を振り返り、カウンセラーとしての自分の応答・姿勢がクライアントの語り・気持ちに及ぼす影響について述べるができる。(DPの「倫理観・社会的責任」に対応) 3. クライアントが「カウンセラーにわかってもらえている」「続けて面接に来たい」と感じられるように、クライアントに対して共感的理解に基づいたコミュニケーションを行うことができる。(DPの「専門知識・理解」と「倫理観・社会的責任」に対応) 4. スーパーヴィジョンを通して得たクライアント理解や自己理解を、次回の面接へと生かそうとすることができる。(DPの「倫理観・社会的責任」に対応) 5. 面接全体を通して、クライアントとの関わりを振り返り、カウンセラーとしてどのように関わったのか、どのような課題があるのかについて述べるができる。(DPの「倫理観・社会的責任」に対応)			
成績評価の方法 試行カウンセリング、面接記録の作成、スーパーヴィジョンへの取り組み(積極的・意欲的態度20%、カウンセリングの質・内容40%、スーパーヴィジョンを通しての理解・援助への活用40%)にて評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 スーパーバイザーと試行カウンセリングに関する事前の打合せを行う。 試行カウンセリングの準備として、対象者(学部生の協力者)への連絡の取り方、打合せの仕方・契約の仕方、実施上の留意点などについてスーパーバイザーの指導のもとに学習する。 試行カウンセリングを実施して、各回ごとに面接記録を作成し、スーパーバイザーに個人スーパーヴィジョンを受ける。 また、試行カウンセリング終了後には、面接過程全体の振り返り・まとめを行う。			

- 第1回 試行カウンセリングの事前指導
- 第2回 試行カウンセリングの事前指導
- 第3回 第1回面接の個人スーパーヴィジョン (1)
- 第4回 第1回面接の個人スーパーヴィジョン (2)
- 第5回 第2回面接の個人スーパーヴィジョン (1)
- 第6回 第2回面接の個人スーパーヴィジョン (2)
- 第7回 第3回面接の個人スーパーヴィジョン (1)
- 第8回 第3回面接の個人スーパーヴィジョン (2)
- 第9回 第4回面接の個人スーパーヴィジョン (1)
- 第10回 第4回面接の個人スーパーヴィジョン (2)
- 第11回 第5回面接の個人スーパーヴィジョン (1)
- 第12回 第5回面接の個人スーパーヴィジョン (2)
- 第13回 面接過程全体に関する個人スーパーヴィジョン (1)
- 第14回 面接過程全体に関する個人スーパーヴィジョン (2)
- 第15回 面接過程全体に関する個人スーパーヴィジョン (3)

【授業及び学習の方法】

学部生の協力者を対象とした5回の試行的なカウンセリングについて、面接記録を作成し個人スーパーヴィジョンを受けることを通して、より望ましい援助を実現できるように努める。カウンセリングで知り得たクライアントの秘密を守るなど、クライアントの福祉を十分に尊重する。

【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】

準備学習：試行カウンセリングの経過のまとめや考察に必要な文献を講読する(各回2時間，計30時間)。

事後学習：個人スーパーヴィジョンの教員からのコメントを振り返り，臨床実践に関する考察を深めるとともに，次の試行カウンセリングの方針を考える(各回2時間，計30時間)。

教科書・参考書等

鏑幹八郎著 「試行カウンセリング」 誠信書房

オフィスアワー 月曜日12:00-13:00

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

- ・この授業を受講するためには、臨床心理士受験資格に関する必修授業科目を必ず履修している必要がある。また、心理臨床相談室でケースを担当するためには、この授業を必ず履修しておく必要がある。
- ・試行カウンセリングの実施にあたっては、クライアントの立場・利益を第一に考えることが必要である。
- ・臨床心理士受験資格を得るための選択必修科目（E群）である。

ナンバリングコード M3PSY-AXXM-40-Ex2 授業科目名 (時間割コード: 971018) 力動的心理療法特論 Dynamic psychotherapy	科目区分	時間割 後期火2	対象年次及び専攻 医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 AXXM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Ex	単位数 2	
担当教員名 林 智一	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 演習90分×15回+自学自習(事前学習30時間+事後学習30時間)			
授業の概要 授業を行う教員は、多様な心理療法の中における精神分析、対人関係論、力動的心理療法の基礎概念、力動的心理療法の技法について、受講者間および受講者と教員による討論を行わせ、学ばせる。最後にレポートを執筆させ、発表させる。			
授業の目的 精神分析の基本概念を理解、習得することを目的とする。たとえば転移-逆転移などの基本概念は、多様なセッティングの心理療法においても有用である。力動的心理療法家を目指す受講者のみならず、広く心理臨床家にとって有用な知見の習得を目指す。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 多様な心理療法の中における精神分析、とりわけ対人関係論の位置づけについて説明できる(DPの「専門知識・理解」に対応)。 2. 力動的心理療法の基礎概念について説明できる(DPの「専門知識・理解」に対応)。 3. 力動的心理療法の技法について説明できる(DPの「専門知識・理解」に対応)。			
成績評価の方法 ・授業テーマについての討論内容 50% ・最終レポート 50%			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス			
【授業計画】 第1回 力動的心理療法に関するミニレクチャー、動画視聴 第2回 精神分析的な心理療法の現在 第3回 心理療法の基本概念の再考 第4回 探索的な介入技法の基礎 第5回 初期面接と心理力動的アセスメント 第6回 面接中期から終結まで 第7回 人生の形成期の特徴と技法 第8回 人生の最盛期の課題と技法 第9回 人生の統合期の課題と技法 第10回 夢の臨床的技法 第11回 特別な事態への対処 第12回 スーパーヴィジョン、事例検討会、個人分析 第13回 精神分析的な心理療法の日本的特徴 第14回 レポートの発表1 第15回 レポートの発表2			
【授業及び学習の方法】 第1回 教員より力動的な心理療法に関するミニレクチャーを行う。その後、フロイトに関する動画を視聴する。事前に教科書を読んでおくこと。合わせてフロイトの生涯についても各自で調べておくこと。その後、テキストのうち授業で扱うテーマ6章を受講者間で話し合せて決定する。 第2回～第13回は、受講者間および教員との各テーマについての討論とする。テキスト1章につき2回の授業を行う。			

テキスト以外の文献を使用することもありうるので、その際には教員より指示する。
第14回・第15回は、受講者各自で1つのテーマを選択し、レポートを執筆したうえで、発表を行う。なお、レポートの表記法、執筆法については、教科書『レポートの組み立て方』を各自で精読し、学修しておくこと。
受講者による討論をもとに授業を進めるので、受講者からの積極的な質問・意見・コメントを期待する。そのためには、必ず予習をしておく必要がある。

【自学自習のためのアドバイス】

各回のテキストの該当章を予習をしてください。不明の概念や用語については、テキストの引用文献や心理学事典、心理臨床大事典、精神分析事典、精神医学事典などを利用してください（事前学習2時間×15回＝30時間）。また、授業の復習はもちろん、討論の際にわからなかった点などは、授業後に調べておいてください（事後学習2時間×15回＝30時間）。

【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】

準備学習：テキスト等を読んで内容、疑問点、意見、コメントをまとめておく。不明の概念、用語については、テキストの引用文献や心理学事典、心理臨床大事典、精神分析事典などで調べておく（各回2時間、計30時間）。
事後学習：授業中の議論内容や教員からのコメントを振り返り、授業テーマに関する考察を深めるとともに、自分自身の研究・心理臨床への応用を考える（各回2時間、計30時間）。

第14回、第15回では、授業で触れた関心のあるテーマについてレポートを執筆し、発表を行う。なお、レポートの表記法、執筆法については、事前に教科書『レポートの組み立て方』を各自で精読し、学修しておくこと。
受講者による討論をもとに授業を進めるので、積極的な質問・意見・コメントを期待する。そのためには、必ず教科書の予習をしておく必要がある。
授業後には、最終レポート執筆に向けて、復習も不可欠である。

【自学自習のためのアドバイス】

テキストの予習をしてください（準備学習2時間×15回＝30時間）。また、討論後にまとめを行う（復習）。さらに、授業内の討論では解決しなかった疑問などについて、授業後に調べておくこと（事後学習2時間×15回＝30時間）。

【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】

準備学習：テキストを読み、疑問点・意見・コメントをまとめておく。不明の概念、用語について調べておく。（各回2時間、計30時間）。
事後学習：授業中の討論内容や教員からのコメントを振り返り、授業テーマに関する考察を深めるとともに、解決しなかった疑問について文献等を調べる（各回2時間、計30時間）。

教科書・参考書等

- 教科書
- ・ 鎌 幹八郎（監） 精神分析的な心理療法の手引き 誠信書房（5095円）
 - ・ 木下是雄 レポートの組み立て方 筑摩書房（780円）
- 参考書等
- ・ 国語辞典（電子辞書でも可。レポートの相互レビュー時に必要です）
 - ・ 心理学事典（平凡社、誠信書房など）
 - ・ 心理臨床大事典（培風館）（38,999円）
 - ・ 精神分析事典（岩崎学術出版、新曜社など）
 - ・ 現代精神医学事典（弘文堂）（19,800円）

オフィスアワー 水曜日16:20-17:00

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

臨床心理士受験資格を得るための選択必修科目（E群）である。

ナンバリングコード M3PSY-AXXM-40-Lx2 授業科目名 (時間割コード: 971019) 心の健康教育に関する理論と実践 Theory and Practice for Mental Health Education	科目区分	時間割 後期月4	対象年次及び専攻 2～医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 AXXM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 谷渕 真也, 川人 潤子	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 講義90分×15回+自学自習(準備学習30時間 + 事後学習30時間)			
授業の概要 公認心理師法第2条第4号は、公認心理師の業務の1つに「教育及び情報の提供」を位置づけている。このような心の健康教育は、すべての国民を対象とするものであり、公認心理師にとっての要心理支援者を大きく広げることにつながる。			
授業の目的 本授業では、心の健康教育の中核として、心理学に基づく知識や方法を提供する、予防開発的な心理教育の理論と実践について学ぶことを目的とする。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 心の健康教育と、そこでの公認心理師の役割について説明できる。 2. 心の健康教育の理論的基盤であるカウンセリング心理学、コミュニティ心理学、学校心理学などについて理解し、説明できる。 3. 心の健康教育について、実践的な計画を立案できる。			
成績評価の方法 ・担当したテーマについての発表やレジュメ 50% (主に到達目標1・2に対応) ・最終レポート 50% (主に到達目標3に対応)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス			
【授業計画】 第1回 イン트로ダクション (川人・谷渕) 第2回 心の健康教育の定義と公認心理師の役割 (谷渕) 第3回 カウンセリング心理学① (川人) 第4回 カウンセリング心理学② (川人) 第5回 カウンセリング心理学③ (川人) 第6回 コミュニティ心理学① (谷渕) 第7回 コミュニティ心理学② (谷渕) 第8回 コミュニティ心理学③ (谷渕) 第9回 学校心理学① (谷渕) 第10回 学校心理学② (谷渕) 第11回 学校心理学③ (谷渕) 第12回 心の健康教育の方法① (川人) 第13回 心の健康教育の方法② (川人) 第14回 心の健康教育の方法③ (川人) 第15回 まとめ (川人・谷渕)			
【授業及び学習の方法】 第1回～第3回および第6回、第9回、第12回は、講義形式で行う。配布資料を参照し、予習・復習を行ってください。(24時間) 第4回、第7回、第10回、第13回では、各領域の健康教育について、調べ学習やグループによるディスカッションを行う。グループで協力して調べ学習を進めてください。(16時間)			

<p>第5回、第8回、第11回、第14回では、各領域の健康教育について受講生が発表を行う。発表資料等の作成に授業外時間も利用してください。(16時間)</p> <p>第15回では、講義の総括ならびに全体を通じての最終レポートを書く。なお、レポートはピアレビューを行う。(4時間)</p>
<p>教科書・参考書等</p> <p>教科書・参考書等は指定しないが、適宜資料を配布する。</p>
<p>オフィスアワー 谷淵・川人：木曜日昼休み</p>
<p>履修上の注意・担当教員からのメッセージ</p> <p>公認心理師資格のための必修科目である。</p>

ナンバリングコード M3PSY-ACXM-40-Px1 授業科目名 (時間割コード: 971020) 心理実践実習 I (ケースフォーミュレーション実習) Practicum in Psychology I (Practicum of Case formulation) Practicum in Psychology I (Practicum of Case formulation)	科目区分	時間割 前期集中	対象年次及び専攻 医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 ACXM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Px	単位数 1	
担当教員名 竹森 元彦, 橋本 忠行, 山田 俊介, 坂中 尚哉, 谷渕 真也, 長谷 綾子	関連授業科目	臨床心理基礎実習	
	履修推奨科目	臨床心理学特論 I、臨床心理学特論 II、臨床心理面接特論 II、面接技法演習、心理実践実習 II (心理臨床事例検討実習 I)、臨床心理実習 I (心理実践実習 III (心理臨床事例検討実習 II))	
学習時間 実習90分×30回+自学自習 (準備学習 15時間 + 事後学習 15時間) 隔週			
授業の概要 心理実践実習 I は、インテーク面接の事例、1～5 回の事例の初期経過の事例について、グループ・ディスカッションおよびグループ・スーパーヴィジョンを行って、そのケースの見立てや面接方針 (ケースフォーミュレーション) 過程を検討する。通年で2年間行う。M1は、そのような検討会の場に参加して議論する。M2は、事例検討に参加しての議論を深めると共に、自分の担当した事例の初期経過について発表する。事例の初期対応と見立て・面接方針 (ケースフォーミュレーション) について、2年間を通して修得する。			
授業の目的 インテーク面接、1～5 回の事例の初期経過報告等の事例検討会によって、インテーク面接とは何か、そこでの事例の読み方、事例の初期の展開の仕方、見立てや面接方針の立て方などについて学ぶことを目的とする。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. インテーク面接の事例報告、事例の初期展開の事例報告の議論を通して、事例の見立てや面接方針の立て方 (ケースフォーミュレーション)、事例を担当する上での自己の課題などについて記述することができる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 2. 心理に関する支援を要する者等に関するコミュニケーション・心理検査・心理面接の知識の修得、ニーズの把握及び支援計画の作成について説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 3. インテーク面接の事例報告の議論と、自分が担当した初期事例報告の発表を通して、ケースフォーミュレーションの進め方や面接方針、自己の課題などについて、記述することができる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 4. 心理に関する支援を要する者等に関するコミュニケーション・心理検査・心理面接の技能・ニーズの把握及び支援計画の作成について修得できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。			
成績評価の方法 発表や討議への取り組み (50%)、各回のレポート (50%) によって総合的に評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス (担当: 竹森元彦, 橋本忠行, 山田俊介, 坂中尚哉, 谷渕真也, 長谷綾子, 太田美里) 1年次 (M1) 【授業計画】 第1回 オリエンテーション 第2回 事例検討会への参加と議論 (1) 第3回 事例検討会への参加と議論 (2) 第4回 事例検討会への参加と議論 (3) 第5回 事例検討会への参加と議論 (4) 第6回 事例検討会への参加と議論 (5) 第7回 事例検討会への参加と議論 (6) 第8回 事例検討会への参加と議論 (7)			

- 第9回 事例検討会への参加と議論 (8)
- 第10回 事例検討会への参加と議論 (9)
- 第11回 事例検討会への参加と議論 (10)
- 第12回 事例検討会への参加と議論 (11)
- 第13回 事例検討会への参加と議論 (12)
- 第14回 事例検討会への参加と議論 (13)
- 第15回 事例検討会への参加と議論 (14)

【授業及び学習の方法】

インテーク面接や、1～5回の初期事例経過報告に関する事例素材に基づき、討議をおこなう。グループ・ディスカッションならびにグループ・スーパービジョン形式を用い、授業参加者の実践経験を踏まえた発言を活用しながら、事例素材を多面的かつ精密に検討していく。そのような事例検討の参加・議論を通して、事例についての初期対応、見立てや面接方針の立て方について学ぶ。

2年次 (M2)

【授業計画】

- 第16回 オリエンテーション
- 第17回 事例検討会における事例発表と議論 (1)
- 第18回 事例検討会における事例発表と議論 (2)
- 第19回 事例検討会における事例発表と議論 (3)
- 第20回 事例検討会における事例発表と議論 (4)
- 第21回 事例検討会における事例発表と議論 (5)
- 第22回 事例検討会における事例発表と議論 (6)
- 第23回 事例検討会における事例発表と議論 (7)
- 第24回 事例検討会における事例発表と議論 (8)
- 第25回 事例検討会における事例発表と議論 (9)
- 第26回 事例検討会における事例発表と議論 (10)
- 第27回 事例検討会における事例発表と議論 (11)
- 第28回 事例検討会における事例発表と議論 (12)
- 第29回 事例検討会における事例発表と議論 (13)
- 第30回 事例検討会における事例発表と議論 (14)

【授業及び学習の方法】

インテーク面接及び1～5回の初期事例経過報告に関する事例発表を行い、その事例の発表素材に基づき、討議をおこなう。グループ・ディスカッションならびにグループ・スーパービジョン形式を用い、授業参加者の実践経験を踏まえた発言を活用しながら、事例素材を多面的かつ精密に検討していく。そのような事例検討の発表・参加・議論を通して、事例についての初期対応、見立てや面接方針の立て方などについて修得する。

心理臨床相談室で担当した実際の事例を検討する。実習において知り得た個人の秘密の保持について、実習生が十分配慮するよう指導する。

2年間、通年の授業である。隔週・1コマで行う。

【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】

準備学習：発表者は相談室内のインテーク面接に陪席した際、面接内容を逐語録にまとめ、インテークカンファレンスの発表資料としてインテーク報告書を作成する

(各回1時間、計15時間)。

事後学習：インテークカンファレンスの議論内容や教員からのコメントを振り返り、クライアントの心理アセスメント及びその対応についての理解を深めるとともに、自分自身の「見立てる」力を高める (各回1時間、計15時間)。

教科書・参考書等

必要に応じて紹介する。

オフィスアワー 金曜日8:50-10:20

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

公認心理師資格取得のための必修科目である。

ナンバリングコード M3PSY-ACXM-40-Px1 授業科目名 (時間割コード: 971021) 心理実践実習Ⅱ (心理臨床事例検討実習Ⅰ) Practicum in Clinical Psychology I (Case Conference in Clinical Psychology I) Practicum in Clinical Psychology I (Case Conference in Clinical Psychology I)	科目区分	時間割 前期集中	対象年次及び専攻 医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 ACXM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Px	単位数 1	
担当教員名 竹森 元彦, 橋本 忠行, 山田 俊介, 坂中 尚哉, 谷渕 真也, 長谷 綾子	関連授業科目	心理実践実習Ⅰ	
	履修推奨科目	面接技法演習、臨床心理実習Ⅱ	
学習時間	実習90分×2コマ×15回+自学自習 (準備学習 15時間 + 事後学習 15時間)		隔週
授業の概要 本研究科附属心理臨床相談室において、院生スタッフが担当する心理臨床面接の事例について検討する。大学院1年として、その事例検討の場に参加する。そして、実際の事例報告から事例の展開、担当者の関わり方や理解の仕方についての議論を通して、大学院2年になって、自分がケース担当するための準備とする。			
授業の目的 授業は、通年15回 (隔週) おこなう。まず事例提供者が事例の概要、見立て、心理療法の展開過程を提示し、さらに、担当者としてどのように考えどのように関わっていたかなどの主観的な読みを提示する。そのうえで、大学院1年の時は、参加者として、質疑応答やディスカッションを通して、心理臨床事例に関して理解を深めていく。同時に、セラピストとしての態度、関わり方等に関しても、講義での議論や演習経験と関連づけながら、学んでいく。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 事例検討を通して、事例に対するセラピストとしての倫理性の理解が深めることができる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 2. クライアントの心に生じていること、セラピストの心に生じていること、面接関係や臨床場面に生じていること、理解が深めることができる (心理に関する支援を要する者等に関するコミュニケーション・心理検査・心理面接の知識の修得) (DPの「専門知識・理解」に対応)。 3. 個々の事例に即して、自らの事例理解を見直そうとする姿勢の程度や、発表者がクライアントとの臨床体験に立ち戻って捉え直すことを促進するような関わり方の姿勢が深めることができる (心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成が説明できる) (DPの「専門知識・理解」に対応)。			
成績評価の方法 発表や討議への取り組み (50%)、各回のレポート (50%) によって総合的に評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス (担当: 竹森元彦, 橋本忠行, 山田俊介, 坂中尚哉, 谷渕真也, 長谷綾子, 太田美里) 【授業計画】 授業は、通年15回 (隔週) おこなう。まず事例提供者が事例の概要、見立て、心理療法の展開過程を提示し、さらに、担当者としてどのように考えどのように関わっていたかなどの主観的な読みを提示する。質疑応答やディスカッションを通して、心理臨床事例に関して理解を深めていく。同時に、セラピストとしての態度、関わり方等に関しても、各自の実践事例と関連づけながら、体得していく。			
第1回 オリエンテーション 第2回 事例検討 (1) 第3回 事例検討 (2) 第4回 事例検討 (3) 第5回 事例検討 (4) 第6回 事例検討 (5)			

- 第7回 事例検討 (6)
- 第8回 事例検討 (7)
- 第9回 事例検討 (8)
- 第10回 事例検討 (9)
- 第11回 事例検討 (10)
- 第12回 事例検討 (11)
- 第13回 事例検討 (12)
- 第14回 事例検討 (13)
- 第15回 事例検討 (14)

【授業及び学習の方法】

毎回、事例提供者の事例に基づき、討議をおこなう。

グループ・ディスカッションならびにグループ・スーパービジョン形式を用いて、授業参加者の実践経験を踏まえた発言を活用しながら、事例を丁寧に検討していく。大学院1年として、そのような事例検討の場に参加し、その事例のクライアントの心に生じていること、セラピストの心に生じていること、治療関係や臨床場面に生じていること、深く理解を、深めていく。各回のレポートを提出し、教員がレポートの指導を行う。通年の授業である。隔週で行う。

心理臨床相談室で担当した実際の事例を通して検討する。実習において知り得た個人の秘密の保持について十分配慮する。

本心理実践実習は、心理に関する支援を要する者の心理状態を観察し、その者及びその関係者の相談に応じ、援助を行うことを目的とした実習であり、実習において担当ケース（心理に関する支援を要する者等を対象とした心理的支援）等に関する実習時間としてカウントする。

【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】

準備学習：相談室内での担当面接事例を聴講する中でクライアントとセラピストの関係性に基づいた対話に注目するために、心理臨床事例論文（文献）を講読し、事例の展開を自学する（各回1時間、計15時間）。

事後学習：ケースカンファレンスの議論内容や教員からのコメントを振り返り、担当事例に関する考察を深めるとともに、自分自身の心理臨床観（基本姿勢を含む）への応用を考える（各回1時間、計15時間）。

教科書・参考書等

必要に応じて紹介する。

オフィスアワー 金曜日 12:00-13:00

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

- ・心理臨床相談室の運営に関わるスタッフとして、相談室全体として来談者が安心して来談してカウンセリングを受けられるように、積極的・主体的に運営に関わり、協力すること。
- ・公認心理師資格の受験に必要な必修科目である。

ナンバリングコード M3PSY-CXXM-40-Px1 授業科目名 (時間割コード: 971022) 心理実践実習A (地域医療実習)	科目区分	時間割 前期集中	対象年次及び専攻 医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 CXXM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Px	単位数 1	
担当教員名 角 徳文, 神原 憲治, 竹森 元彦, 林 智一, 坂中 尚哉, 長谷 綾子	関連授業科目 心理実践実習B、C、D 精神医療における心理支援		
	履修推奨科目 心身医学と心理支援		
学習時間 1回360分×8回 + 自学自習 (準備学習 15時間 + 事後学習 15時間)			
授業の概要 この授業は、実習生が1年次に地域の精神科や心療内科病院・クリニックにおいて心理実践実習を積むことにより、地域の精神科や心療内科における心のケアの現状を学ぶとともに、診察陪席、インテーク面接、カンファレンス、デイケア等の見学・観察・支援の補助を中心とした実習を通して、公認心理師の活動や実情、課題などを学ぶことを目的とする。とくに心理的支援の実際や心理検査の有効な使い方、集団療法をはじめとするグループ活動、また医師や看護師をはじめとする多職種との連携の在り方など、公認心理師が身につけるべき知識を体験的に学ぶ。			
授業の目的 学部で培った心理に関する支援の実態に対する基礎的な理解をもとに、地域の精神科や心療内科という心理実践の現場で、心理に関する支援を要する者に対する支援（心理に関する支援を要する者の心理状態を観察し、その支援の補助）についての実習を行うことを目的とする。そこで、心理に関する支援を要する者等に関するニーズの把握及び支援計画の作成とチームアプローチ、多職種連携及び地域連携、公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解などについて修得する。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
(1) 心理に関する支援を要する者に関する知識および技能を修得し、その要点を説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 (2) 心理に関する支援を要する者の理解とニーズの把握を通して、支援計画を作成できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 (3) 心理に関する支援を要する者へのチームアプローチに参加して、指導者の援助過程を見学し、要支援者の同意が得られたケースでは自ら援助を実践できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 (4) 多職種連携及び地域連携の場に参加し、基本的技能を修得し、その要点を説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 (5) 公認心理師の職業倫理及び法的義務について、説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。			
成績評価の方法 本学の実習指導者および外部実習施設の指導者からの臨床評価レポート等による。 実習時は、毎回レポートを教員に提出して指導を受ける(50%)とともに、実習終了後に実習終了レポート(50%)を提出する。それらによって評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 地域の精神科や心療内科・クリニックにおいて心理実践実習を行う。院生は1施設につき1～2名で実習に臨む。実施時期は主に後期とする。基本的に週1回等、定期的実施する。1回4コマ(6時間)、通年、計48時間を基本とする。 第1回 事前指導①: 地域の精神科や心療内科病院、クリニックにおける心理職の役割、多職種連携について学ぶ 第2回 事前指導②: 地域の精神科や心療内科病院、クリニックにおける心理職の実践について具体的に学ぶ 第3回 心理実践実習① 各実習施設に学生が分かれて実習を行う。 第4回 心理実践実習②			

- 第5回 心理実践実習③
- 第6回 心理実践実習④
- 第7回 心理実践実習⑤
- 第8回 事後指導：実習振り返り

【授業及び学習の方法】

第1～2回は、精神科や心療内科病院における心理援助者の役割や多職種連携についての講義をもとにして、グループ活動（演習）を通して、意見交換をする。また精神科や心療内科病院の実習に臨む基本的な姿勢やマナーなどについても学ぶ。精神科や心療内科病院において、どのような心理的支援を行っているのか、どのような視点から現場の様子を理解すべきかなどの観点から見学する。また、心理的支援や心理援助職の多職種の連携は直接にみえない（コミュニケーション）ことから、その現場で生じている現象やコミュニケーションをどのように取り出してくるのか、それからどのように理解するのか、教員より指導助言を行う。さらに、事前見学などとおして施設の具体的なイメージをもち、該当施設における心理的支援の可能性について議論を行い、理解の視点について準備する。また、実習において知り得た個人の秘密の保持について十分配慮することについて説明を受ける。

第3回～7回は、1施設につき1～3名で現場実習に入る。実習中に感じたことや疑問、指導助言を受けたことなどについて実習ノートに記録し、実習終了後は出会った人たちの心理的理解や、援助的なコミュニケーションについて実習施設の担当者、実習担当教員、専攻教員からの指導助言を受ける。また、実習担当教員による巡回指導は、実習期間中、概ね週1回以上定期的に指導する。

第8回は、全体での振り返りの時間とする。実習の振り返りについて各人がまとめたものをもとに、各実習施設における心理的支援のあり方・違いについての考察、チーム支援における心理援助者の役割や守秘義務の取り扱いなどについて意見交換を行い、教員も含めて検討する。その際、他の院生の体験を通じて、心理援助者としての役割、援助的なコミュニケーションのあり方、今後の自己学習のための課題等に関する考察をさらに深める。

この実習では、学部の実習で得た公認心理師に必要な知識・技能の基礎的な理解の上に、①心理に関する支援を要する者等に関する以下の知識及び技能の修得（コミュニケーション、心理検査、心理面接、地域支援等）、②心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成、③心理に関する支援を要する者へのチームアプローチ、④多職種連携及び地域連携、⑤公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解について、見学による観察と共に、心理に関する支援を要する者等に対して支援の補助を実践しながら、実習指導者又は実習担当教員による指導を受ける。実習施設は香川県内の施設である。

【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】

準備学習：医療領域や他職種連携ならびに精神保健領域の法令に関する文献等を読んで内容、疑問点、意見をまとめておく。発表者は実習前の報告会の発表資料として準備する（各回1時間、計15時間）。

事後学習：実習先での実習体験や実習指導者からの指導や実習担当教員からのコメントを振り返り、医療実習に関する考察を深めるとともに、自分自身の地域医療への応用を考える（各回1時間、計15時間）。

教科書・参考書等

必要に応じて紹介する。

オフィスアワー 金曜日16:20～17:50

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

実習先の医療機関においては、医療倫理を守り、指導者に従うことが必須である。

公認心理師資格の受験に必要な必修科目である。

ナンバリングコード M3PSY-CBXM-40-Px2 授業科目名 (時間割コード: 971023) 心理実践実習B (福祉・教育実習) Practicum in Clinical Psychology B (welfare facilities and educational facilities)	科目区分	時間割 前期集中	対象年次及び専攻 医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 CBXM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Px	単位数 2	
担当教員名 橋本 忠行, 山田 俊介, 林 智一, 竹森 元彦, 野口 修司, 谷淵 真也, 長谷 綾子	関連授業科目	心理実践実習A、C、D 教育臨床心理学特論、福祉心理学特論、産業・労働心理学特論	
	履修推奨科目	発達臨床心理学特論	
学習時間 1回360分×15回 + 自学自習 (準備学習45時間+事後学習45時間)			
授業の概要 この授業は、実習生が、1年次に、地域の教育・福祉施設において心理実践実習を積むことによって、地域の教育施設及び福祉施設における心のケアの現状を学ぶとともに、施設の見学・観察・支援の補助を中心とした実習を通して、公認心理師の活動や実情、課題などを学ぶことを目的とする。とくに心理的支援の実際や心理検査の有効な用い方、グループ活動、また教員や施設職員をはじめとする多職種との連携の在り方など、公認心理師が身につけるべき知識を体験的に学ぶための臨地実習と事前事後指導を行う。			
授業の目的 学部で培った心理に関する支援の実態に対する基礎的な理解をもとに、地域の教育・福祉施設という心理実践の現場で、心理に関する支援を要する者に対する支援（心理に関する支援を要する者の心理状態を観察し、その者およびその関係者の相談に応じ、心理的支援を行うこと）についての実習を行うことを目的とする。そこで、心理に関する支援を要する者等に関するニーズの把握及び支援計画の作成とチームアプローチ、多職種連携及び地域連携、公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解などについて修得する。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
(1) 心理に関する要支援者に関する知識および技能を修得し、その要点を説明できる (DPの「研究能力・応用力」と「倫理観・社会的責任」に対応)。 (2) 要支援者の理解とニーズの把握を通して、支援計画を作成できる (DPの「研究能力・応用力」と「倫理観・社会的責任」に対応)。 (3) 要支援者へのチームアプローチに参加して、指導者の援助過程を見学し、要支援者の同意が得られたケースでは自ら援助を実践できる (DPの「研究能力・応用力」と「倫理観・社会的責任」に対応)。 (4) 多職種連携及び地域連携の場に参加し、基本的技能を修得し、その要点を説明できる (DPの「研究能力・応用力」と「倫理観・社会的責任」に対応)。 (5) 公認心理師の職業倫理及び法的義務について、説明できる (DPの「倫理観・社会的責任」に対応)。			
成績評価の方法 本学の実習指導者および外部実習施設の指導者からの臨床評価レポート等による。実習時は、毎回レポートを教員に提出して指導を受ける(50%)とともに、実習終了後に実習終了レポートを提出する(50%)。それらによって評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 地域の福祉施設や教育関係施設(4か所)に、学生が分かれて、心理実践実習を行う。教育施設は、学生10名。福祉関係施設は、1施設につき学生は2~3名である。実施時期は、夏期休暇中から後期にかけてである。夏期休暇中に集中的に実施する施設もあるし、週1回等、定期的実施する施設もある。1回4コマ(6時間)、通年、計90時間を基本とする。 第1回 事前指導①: 地域における教育施設及び福祉施設における心理援助者の役割、多職種連携について学ぶ 第2回 事前指導②: 実習先見学 第3回 心理実践実習① 各施設に学生が分かれて、それぞれの施設での実習を行う。			

- 第4回 心理実践実習②
- 第5回 心理実践実習③
- 第6回 心理実践実習④
- 第7回 心理実践実習⑤
- 第8回 心理実践実習⑥
- 第9回 心理実践実習⑦
- 第10回 心理実践実習⑧
- 第11回 心理実践実習⑨
- 第12回 心理実践実習⑩
- 第13回 心理実践実習⑪
- 第14回 事後指導①：実習振り返り
- 第15回 事後指導②：実習振り返り

以上の計画については、実習施設の状況や事情などによって変更することがある。

【授業及び学習の方法】

第1～2回は、福祉・教育における心理援助者の役割や多職種連携についての講義をもとにして、グループ活動（演習）を通して、考えたり、意見交換をする。また福祉・教育施設に臨む基本的な姿勢やマナーなどもについても学ぶ。福祉・教育機関において、どのような心理的支援を行っているのか、どのような視点から現場の様子を理解すべきかなど、心理的支援や心理援助職の多職種の連携は、物理的なものではなく、直接にみえない（コミュニケーション）ので、その現場で生じている現象やコミュニケーションをどのように取り出してくるのか、それからどのように理解するのか、教員からの指導助言を行う。さらに、事前見学などをとおして、実習先の施設の具体的なイメージをもち、そこでの心理的支援の可能性についての議論をもとに、実習に入る前の準備や理解の視点について準備する。また、実習において知り得た個人の秘密の保持について十分配慮することについて十分に説明を受ける。

第3回～13回は、1施設につき1～3名で現場実習に入る。実習中に感じたことや疑問、指導助言を受けたことなどを、実習ノートに記録をとり、実習終了後は、出会った人たちの心理的理解や援助的なコミュニケーションについて、実習施設の担当者、実習担当教員、専攻教員からの指導助言を受ける。また、実習担当教員による巡回指導は、実習期間中、概ね週1回以上定期的に指導する。

第14～15回は、全体での振り返りの時間である。実習の振り返りについて各人がまとめたものをもとに、各実習施設における心理的支援のあり方・違いについての考察、チーム支援における心理援助者の役割や守秘義務の取り扱いなどについて意見交換を行う。また、教員からの指導助言を行う。他の院生の体験を通じて、心理援助者としての役割、援助的なコミュニケーションのあり方、今後の自己学習のための課題などの考察をさらに深める。

大学段階での実習を通じて得た公認心理師に必要な知識・技能の基礎的な理解の上に、①心理に関する支援を要する者等に関する以下の知識及び技能の修得（コミュニケーション、心理検査、心理面接、地域支援等）、②心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成、③心理に関する支援を要する者へのチームアプローチ、④多職種連携及び地域連携、⑤公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解について、見学だけでなく、心理に関する支援を要する者等に対して支援を実践しながら、実習指導者又は実習担当教員による指導を受ける。実習施設は香川県内の施設である。

本心理実践実習は、福祉・教育領域における、心理に関する支援を要する者の心理状態を観察し、その者及びその関係者の相談に応じ、援助を行うことを目的とした実習であり、実習において担当ケース（心理に関する支援を要する者等を対象とした心理的支援）等に関する実習時間としてカウントする。

【自学自習のためのアドバイス】

心理援助者の役割や多職種連携について、図書館などを利用して調べ、整理する。実習先施設については、あらかじめ各自で調べておく。また、事後学習として、実習で分からなかったこと、疑問に思ったことなどについては、自分で調べる。

【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】

準備学習：実習分野・実習施設に対応した心理援助者の役割や多職種連携について文献等を読んで内容、疑問点、意見をまとめておく。臨地実習での行動指針を考えておく（各回3時間、計45時間）。

事後学習：臨地実習での経験や実習指導者からのコメント、事前・事後指導における教員からのコメントを振り返り、当該実習分野での臨床実践に関する考察を深める（各回3時間、計45時間）。

教科書・参考書等

必要に応じて紹介する。

オフィスアワー 山田：金曜日16:20～17:50

林：水曜日16:20-17:00

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

- ・実習先の教育・福祉施設においては、倫理を守り、指導者に従うことが必須である。
- ・公認心理師受験のための必修科目である。

ナンバリングコード M3PSY-ACXM-40-Px1 授業科目名 (時間割コード: 971024) 心理実践実習C(精神・神経領域病院実習) Practicum in Clinical Psychology C (Clinical Practice in Psychiatry) Practicum in Clinical Psychology C (Clinical Practice in Psychiatry)	科目区分	時間割 前期集中	対象年次及び専攻 2～医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 ACXM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Px	単位数 1	
担当教員名 角 徳文, 神原 憲治, 竹森 元彦, 長谷 綾子, 中村 祐, 橋本 忠行	関連授業科目 心理実践実習A、B、D 精神医療における心理支援		
	履修推奨科目		
学習時間 実習90分×4コマ×8回+自学自習(準備学習 15時間 + 事後学習 15時間)			
授業の概要 この授業では、修士課程1年次の心理実践実習A,B(地域病院実習)を踏まえ、実習生が精神科における心のケアの現状を学ぶとともに、診察陪席、インテーク面接、心理検査、心理面接、カンファレンス、デイケア等を中心とした実習を通して、心理に関する支援を要する者の同意が得られたケースに関わりながら、公認心理師の活動や実情、心理的支援を行う上での課題などについて学ぶために、本学の附属病院精神科・神経科及び地域の病院(精神科)において実習を行う。とくに精神科における心理的支援の現状や心理検査の有効な使い方、集団療法をはじめとするグループ活動、個人の心理的理解・支援のあり方、また医師や看護師をはじめとする多職種との連携の在り方など、公認心理師が身につけるべき知識を体験的に学べる実習とする。修士2年次に選択する科目とする。			
授業の目的 学部で培った心理に関する支援の実態に対する基礎的な理解をもとに、附属病院精神科・神経科及び地域の病院(精神科)という心理実践の現場で、心理に関する支援を要する者に対する支援(心理に関する支援を要する者の心理状態を観察し、その者およびその関係者の相談に応じ、援助を行うこと)についての実習を行うことを目的とする。そこで、心理に関する支援を要する者等に関するニーズの把握及び支援計画の作成とチームアプローチ、多職種連携及び地域連携、公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解などについて修得する。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 心理に関する支援を要する者についての知識および支援の技能を修得し、その要点を説明できる。(DPの「専門的知識・理解」に対応) 2. 心理に関する支援を要する者の理解とニーズの把握を通して、支援計画を作成できる。(DPの「専門的知識・理解」に対応) 3. 心理に関する支援を要する者へのチームアプローチに参加して、指導者の援助過程を見学し、心理に関する支援を要する者の同意が得られたケースでは自ら援助を実践できる。(DPの「倫理観・社会的責任」に対応) 4. 多職種連携及び地域連携の場に参加し、基本的技能を修得し、その要点を説明できる。(DPの「専門的知識・理解」に対応) 5. 公認心理師の職業倫理及び法的義務について、説明できる。(DPの「専門的知識・理解」に対応)			
成績評価の方法 本学の実習指導者および外部実習施設の指導者からの臨床評価レポート等による。 実習前は、計画書を教員に提出して指導を受ける(30%)。実習中は巡回指導等において改善点と課題を確認し、残りの実習に生かす指導を受ける(30%)。終了後に実習終了レポート及び成果発表会で振り返りを行う(40%)を提出する。それらによって評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】(担当:角徳文, 神原憲治, 竹森元彦, 長谷綾子, 中村祐, 橋本忠行, 山下明子) 附属病院精神科・神経科及び地域の病院(精神科)において、心理実践実習を行う。事前指導と見学など事前学習を十分に行ったうえで、学生は2～3人一組でグループに分かれて実習に臨む。実施時期は通年とし、必要に応じて夏			

期休暇中も実習を行う。1日の実習スケジュールとして、病院内実習、各グループでの振り返りや学習時間、実習指導者及び診療科医師による助言、スーパーヴィジョンの時間が含まれる。

第1回【事前指導】附属病院精神科・神経科及び地域の病院（精神科）における心理援助者の役割、多職種連携、職業倫理・法的義務について、講義と演習を通して学ぶ。

第2回【事前指導】附属病院精神科・神経科及び地域の病院（精神科）における心理援助者の役割、多職種連携、職業倫理・法的義務について、講義と演習を通して学ぶ。さらに実習先の見学を行うことで実習への心構えを持ち、事前の自主学習を深める。

第3回 心理実践実習①（附属病院の多職種スタッフによる「チーム医療」講話）

第4回 心理実践実習②（現場実習と振り返り、記録）

第5回 心理実践実習③（現場実習と振り返り、記録）

第6回 心理実践実習④（現場実習と振り返り、記録）

第7回 心理実践実習⑤（現場実習と振り返り、記録）

第8回【事後指導】個人及びグループによる振り返り：目標の達成度、自己の課題を確認

以上の計画については、実習施設の状況や事情などによって変更することがある。

【授業及び学習の方法】

以下内容について、自学自習時間を準備時間15時間、事後学習15時間とする。

第1～2回は、精神科医療における心理援助者の役割や多職種連携についての講義をもと、グループ活動（演習）の中で考えを深め意見交換をする。精神科医療機関において、どのような心理的支援を行っているのか、どのような視点から現場の様子を理解すべきか、現場で必要とされる基礎的なマナーなど、基本的事項について学習する。また、心理的支援や心理援助職の多職種の連携は目にみえないことから、現場で生じている現象やコミュニケーションを多職種連携の観点からどのように理解するのか、教員が提供する教材をもとに検討する。さらに、事前見学などを通して、各医療施設の特徴や施設の規模、目的などを知ることを重視する。またそれら現場における心理的支援の可能性について議論し、実習に入る前の準備や理解の視点について身に付ける。さらに、実習において知り得た個人の秘密の保持について十分配慮することについて説明を受ける。

第3回～7回は、2～3名一組で現場実習に入り、実習中に感じたことや疑問、指導助言を受けたことなどについて実習ノートに記録する。実習終了後は事例理解のために、症状や医学的診断・治療方針と共に、心理援助者としての理解や心理援助的なコミュニケーションについて、実習指導者及び医師からの指導を受ける。

第8回は、事後指導として全員での振り返りの時間とする。実習の振り返りについて各人がまとめたものをもとに、実習施設での医療的支援の現状と共に、心理的支援についての考察、チーム医療における心理援助者の役割・守秘義務の取り扱いなどについて意見交換、教員を含めたディスカッションを行う。他学生の体験を共有することを通じて、心理援助者としての役割やコミュニケーションのあり方、今後の自己学習のための課題についてさらに考察を深める。

大学（学部）での実習を通じて得た公認心理師に必要な知識・技能の基礎的な理解の上に、①心理に関する支援を要する者等に関する以下の知識及び技能の修得（コミュニケーション、心理検査、心理面接、地域支援等）、②心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成、③心理に関する支援を要する者へのチームアプローチ、④多職種連携及び地域連携、⑤公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解について、見学だけでなく、心理に関する支援を要する者等に対して支援を実践しながら、実習指導者又は実習担当教員による指導を受ける。実習担当教員による巡回指導は、実習期間中、概ね週1回以上定期的に指導する。

本科目は、精神・神経領域における、心理に関する支援を要する者の心理状態を観察し、その者及びその関係者の相談に応じ、援助を行うことを目的とした実習であり、実習において担当ケース（心理に関する支援を要する者等を対象とした心理的支援）等に関する実習時間として計上する。

【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】

（準備学習）

これまで受講した関連の講義資料や文献を読んで、内容理解を深め、疑問点や自分なりの見解をまとめておく。全体の事前学習及び実習中、成果発表会の際に質問したり、意見を述べたりできるよう準備する。（各回2時間：30時間）

（事後学習）

全体の事前学習及び事後学習、成果発表会、現場実習の体験内容を振り返り、学んだ内容をまとめ、今後の実習や学習に向けて課題を抽出し、新しい具体的な目標を考える。（各回2時間：15時間）

教科書・参考書等

必要に応じて紹介する。

オフィスアワー 火曜日16:20-17:50（三木町医学部キャンパス基礎臨床研究棟3階）

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

- ・実習先の医療機関においては、医療倫理を守り、指導者に従うことが必須である。
- ・毎回の実習ごとにレポートを丁寧に作成して、気づきや学びを深めること。
- ・公認心理師資格の受験に必要な必修科目である。

院外実習先の協力医療機関は貴重な時間を実習生のために無償で割いています。COVID-19などによるやむを得ないスケジュール変更の際には、実習スケジュールを最優先させてください。

ナンバリングコード M3PSY-ACXM-40-Px1 授業科目名 (時間割コード: 971025) 心理実践実習D (身体領域病院実習) Practicum in Clinical Psychology D (Clinical Practice in Physical Health)	科目区分	時間割 前期集中	対象年次及び専攻 2～医学系研究科修士課程
	水準・分野 M3PSY	DP・提供部局 ACXM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Px	単位数 1	
担当教員名 神原 憲治, 角 徳文, 竹森 元彦, 長谷 綾子, 日下 隆, 辻 晃仁, 南野 哲男, 野口 修司, 川人 潤子	関連授業科目	心理実践実習A、B、C	
	履修推奨科目	心身医学と心理支援	
学習時間 実習90分×4コマ×8回+自学自習(準備学習 15時間 + 事後学習 15時間)			
授業の概要 この授業では、修士課程1年次の心理実践実習A、B(外部実習)を踏まえ、実習生が主に身体面を扱う診療科における心のケアの現状を学ぶとともに、診察陪席、カンファレンス等の見学・観察・支援の補助を中心とした実習を通して、臨床心理士及び公認心理師の活動や実情、心理的援助をする上での自分の課題などを学ぶために、本学の附属病院もしくはその関連医療機関において、実習を行う。とくに生活習慣病や腫瘍性疾患など医療現場で頻度が高く心身両面にかかる疾患における心理的支援の実際や、心理検査の有効な使い方、また医師や看護師をはじめとする多職種との連携の在り方など、臨床心理士及び公認心理師が身につけるべき知識を体験的に学べる実習とする。さらに、各診療科医師及び実習指導者が指導助言を行う。修士2年次に選択する科目とする。			
授業の目的 学部で培った心理に関する支援の実態に対する基礎的な理解をもとに、医療における心理実践の現場で、心理に関する支援を要する者に対する支援(心理に関する支援を要する者の心理状態を観察、支援の補助)についての実習を行うことを目的とする。そこで、主として身体的もしくは心身にかかる疾患において、ストレスと疾病との関係、心理的支援を要する者等に関するニーズの把握及び支援計画の作成とチームアプローチ、多職種連携及び地域連携、公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解などについて修得する。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
(1) 心理に関する支援を要する者に関する知識および技能を修得し、その要点を説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) (2) 心理に関する支援を要する者の理解とニーズの把握を通して、支援計画を作成できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) (3) 心理に関する支援を要する者へのチームアプローチに参加して、指導者の援助過程を見学し、本人の同意が得られたケースでは自ら援助を実践できる。(DPの「倫理観・社会的責任」に対応) (4) 多職種連携及び地域連携の場に参加し、基本的技能を修得し、その要点を説明できる。(DPの「倫理観・社会的責任」に対応) (5) 公認心理師の職業倫理及び法的義務について、説明できる。(DPの「倫理観・社会的責任」に対応) (6) 身体的もしくは心身にかかる疾患において、ストレスと疾病との関係を理解できる。(DPの「専門知識・理解」に対応)			
成績評価の方法 本学の実習指導者および外部実習施設の指導者からの臨床評価レポート等による。 実習前は、計画書を教員に提出して指導を受ける(30%)。実習中は巡回指導等において改善点と課題を確認し、残りの実習に生かす指導を受ける(30%)。終了後に実習終了レポート及び成果発表会で振り返りを行う(40%)を提出する。それらによって評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】(担当: 神原憲治, 角徳文, 竹森元彦, 長谷綾子, 日下隆, 辻晃仁, 南野哲男, 野口修司, 山下明子, 太田美里) 附属病院で働く多職種スタッフによる「チーム医療」講話を聴き、心理職の役割や期待される業務についてディスカッションを行う。その後、小児科及び循環器内科。緩和ケアにおいて、グループ・ローテーション形式で心理実践			

実習を行う。事前指導及び見学等により事前学習を十分に行ったうえで、学生は2～3人一組でグループに分かれて実習する。実施時期は、夏期休暇も含む通年とする。

施設の実態などの必要に応じて、夏期休暇中も実習を行う。1日の実習スケジュールとして、病院内実習、各グループでの振り返りや学習時間、実習指導者や診療科医師等による助言の時間とする。

第1回【事前指導】医療機関における心理援助者の役割、多職種連携について講義と演習を通して学ぶ。

第2回【事前指導】実習内容に関連する実務及び多職種連携について講義と演習を通して具体的に学ぶ。

第3回 心理実践実習①（附属病院の多職種スタッフによる「チーム医療」講話）

第4回 心理実践実習②（現場実習と振り返り、記録）

第5回 心理実践実習③（現場実習と振り返り、記録）

第6回 心理実践実習④（現場実習と振り返り、記録）

第7回 心理実践実習⑤（現場実習と振り返り、記録）

第8回【事後指導】個人及びグループによる振り返り：目標の達成度、自己の課題を確認

以上の計画については、実習施設の状況や事情などによって変更することがある。

【授業及び学習の方法】

以下内容について、自学自習時間を準備学習15時間、事後学習15時間とする

第1～2回は、医療における心理援助者の役割や多職種連携についての講義をもとにして、グループ活動（演習）を通して意見交換を行う。また医療機関に臨む基本的なマナーなどもについても学ぶ。その上で、医療機関において具体的にどのような心理的支援を行っているのか、どのような視点から現場の様子を理解すべきかなど、基本的な事項を学ぶ。さらに、心理的支援や心理援助職の多職種の連携は、わかりやすく目にみえるものではないことから、現場で生じている現象やコミュニケーションを多職種連携の観点からどのように理解するか、という点について事前講義で学び、実習に臨む準備を進めていく。また、現場の実践報告や視聴覚教材をとおして実習先の施設の実像を理解し、それら現場における心理的支援の可能性について議論することで、より具体的、実践的なイメージを膨らませていく。他に、実習において知り得た個人の秘密の保持について十分配慮することについて説明を受ける。

第3回は附属病院に勤める多職種スタッフ（専門及び認定看護師、リハビリテーション・スタッフ、ソーシャルワーカー、栄養士、薬剤師、診療報酬事務スタッフ等）による「チーム医療講話」を聴き、心理職の役割や期待される業務について質疑及びディスカッションを行う。

第4回～7回は、2～3名一組での現場実習に入る。実習中に感じたことや疑問、指導助言を受けたことなどについて実習ノートに記録をとり、実習終了後は事例理解のために、症状や医学的診断・治療方針と共に、心理援助者としての理解や心理援助的なコミュニケーションについて医師、実習指導者、実習担当教員からの指導を受ける。また、実習担当教員による巡回指導は、実習期間中、概ね週1回以上定期的に行う。

第8回は、全員での振り返りの時間とする。実習の振り返りについて各人がまとめたものをもとに、実習施設における医療的支援の現状と共に、心理的支援についての考察、チーム医療における心理援助者の役割・守秘義務の取り扱いなどについて意見交流を行う。また、教員からの助言指導を行う。全員で共有することを通じて、心理援助者としての役割やコミュニケーションのあり方、今後の自己学習のための課題などの考察をさらに深める。

【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】

（準備学習）

これまで受講した関連の講義資料や文献を読んで、内容理解を深め、疑問点や自分なりの見解をまとめておく。全体の事前学習及び実習中、成果発表会の際に質問したり、意見を述べたりできるよう準備する。（各回2時間：15時間）

（事後学習）

全体の事前学習及び事後学習、成果発表会、現場実習の体験内容を振り返り、学んだ内容をまとめ、今後の実習や学習に向けて課題を抽出し、新しい具体的目標を考える。（各回2時間：15時間）

教科書・参考書等

必要に応じて紹介する。

オフィスアワー 火曜日12:00～13:00 三木町医学部キャンパス基礎臨床研究棟3階

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

出席を重視する。実習先の医療機関においては、医療倫理を守り、指導者に従うことが必須である。

毎回の実習ごとにレポートを丁寧に作成して、気づきや学びを深めること。

「心身医学と心理支援」を受講のこと

公認心理師資格の受験に必要な必修科目である。

ナンバリングコード 授業科目名 (時間割コード: 971026) 心理実践実習Ⅳ (心理臨床ケース実習)	科目区分	時間割 前期集中	対象年次及び専攻 1～医学系研究科修士課程
	水準・分野	DP・提供部局 BCAM	対象学生・特定プログラムとの対応
	授業形態 Px	単位数 2	
担当教員名 谷渕 真也, 坂中 尚哉, 長谷 綾子, 神原 憲治, 山田 俊介, 竹森 元彦, 林 智一, 橋本 忠行, 野口 修司, 角 徳 文, 川人 潤子	関連授業科目	心理実践実習Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ, A, B, C, D	
	履修推奨科目	面接技法演習, 臨床心理学実習Ⅱ	
学習時間 実習90分×2コマ×30回+自学自習 (準備学習 15時間 + 事後学習 15時間)			
授業の概要 本研究科附属心理臨床相談室や学外実習施設において, 院生が担当したケースについて検討する。事例提供者の発表素材に基づき, グループ・ディスカッション, グループ・スーパーヴィジョンで多面的かつ精密に検討していく。			
授業の目的 心理援助においては, 見立てと方針に基づく介入と心理援助の展開過程を常に振り返り, 介入方法を修正していく必要がある。この授業では, 事例提供者としてそれらをまとめて提示し, その資料をもとに事例を検討し, 事例検討の内容を自験例と関連づけながら再考することを通して, 心理援助者に求められる態度, 知識, 技術を体得することを目的とする。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 事例検討を通して, 事例に対するセラピストとしての倫理性の理解を深めることができる。(公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解) (DPの「倫理観・社会的責任」に対応) 2. クライアントの心に生じていること、セラピストの心に生じていること、面接関係や臨床場面に生じていること、理解を深めることができる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 3. セラピスト自身の体験や理解のあり方への向き合い方と見直しの度合いを深めることができる。(DPの「倫理観・社会的責任」に対応) 4. 参加者として, 個々の事例に即して, 自らの事例理解を見直そうとする姿勢の程度や, 発表者がクライアントとの臨床体験に立ち戻って捉え直すことを促進するような関わりの姿勢を持つことができる。(DPの「倫理観・社会的責任」に対応) 5. 心理に関する支援を要する者等に関するコミュニケーション・心理検査・心理面接の知識の修得, ニーズの把握及び支援計画の作成について説明できる。(DPの「研究能力・応用力」と「倫理観・社会的責任」に対応)			
成績評価の方法 発表や討議への取り組み・検討の内容 (50%)、最終レポート (50%) によって評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は, 100点をもって満点とし, 秀, 優, 良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし, 必要と認める場合は, 合格, 了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス			
【授業計画】 (担当: 谷渕真也, 坂中尚哉, 長谷綾子, 神原憲治, 山田俊介, 竹森元彦, 林智一, 橋本忠行, 野口修司, 角徳文, 太田美里, 山下明子) 授業は, 2年間を通して30回行う。 第1回 オリエンテーション 第2回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (1) 第3回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (2) 第4回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (3) 第5回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (4) 第6回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (5) 第7回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (6)			

- 第8回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (7)
- 第9回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (8)
- 第10回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (9)
- 第11回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (10)
- 第12回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (11)
- 第13回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (12)
- 第14回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (13)
- 第15回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (14)
- 第16回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (15)
- 第17回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (16)
- 第18回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (17)
- 第19回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (18)
- 第20回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (19)
- 第21回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (20)
- 第22回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (21)
- 第23回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (22)
- 第24回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (23)
- 第25回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (24)
- 第26回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (25)
- 第27回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (26)
- 第28回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (27)
- 第29回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (28)
- 第30回 事例提供者の事例をもとにした事例検討を行う (29)

【授業及び学習の方法】

毎回、事例提供者のケースに基づき、討議をおこなう。グループ・ディスカッション、グループ・スーパービジョンの形式で、授業参加者の実践経験を踏まえた発言を活用しながら、担当ケースを多面的かつ精密に検討していく。そのような事例検討を通して、その事例の対人関係の中や場面の中で生じている心理力動や行動の変化への理解を深める。必要に応じて事例検討のレポートを提出し教員がレポートの指導を行う。心理臨床相談室や学外実習施設で担当した実際の事例を通して検討するので、実習において知り得た個人の秘密の保持について、十分配慮する。

【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】

準備学習：心理臨床相談室等での実習の経過のまとめや考察に必要な文献を講読する(各回30分、計15時間)。
 事後学習：個人スーパービジョンの教員からのコメントを振り返り、臨床実践に関する考察を深めるとともに、次のケースの方針を考える(各回30分、計15時間)。

教科書・参考書等

必要に応じて紹介する。

オフィスアワー 金曜日14:40-16:10

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

公認心理師受験資格及び臨床心理士受験資格を得るための必修科目である。

ナンバリングコード M4PSY-BACM-40-Ex4 授業科目名 (時間割コード: 972001) 課題研究 Research subject	科目区分	時間割 前期月5	対象年次及び専攻 2～医学系研究科修士課程
	水準・分野 M4PSY	DP・提供部局 BACM	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Ex	単位数 4	
担当教員名 林 智一, 山田 俊介, 竹森 元彦, 橋本 忠行, 角 徳文, 神原 憲治, 川人 潤子, 野口 修司, 坂中 尚哉, 谷渕 真也	関連授業科目		
	履修推奨科目 臨床心理学研究法特論		
学習時間 演習90分 × 30回 + 自学自習 (準備学習60時間 + 事後学習60時間)			
授業の概要 修士論文研究やその他の研究活動に必要な知識と技術を習得するための授業である。研究テーマの設定, 研究計画の立案と修正, 研究の実施, 結果の分析, 考察の各プロセスについて講義と演習を行う。			
授業の目的 自らの研究課題を, セミナール形式で継続的に検討すると共に, 臨床心理学専攻全体の場で, その成果を発表する。また, 研究を行う場合の留意点, 人権や倫理的問題について十分に配慮する。心理学・臨床心理学的研究法に基づき, 各自の関心のあるテーマに沿って研究を遂行できるよう, 国内の臨床心理学に関する研究動向と共に, 諸外国の臨床心理学の先端の研究動向を参照して, 国際的な研究にも目を向けて, 研究を計画及び遂行・議論できる能力を身につける。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 臨床心理学の研究方法に則って修士論文を完成させることができる。(DPの「専門知識・理解」と「研究能力・応用力」に対応) 2. 研究倫理を理解し, 遵守することができる。(DPの「倫理観・社会的責任」に対応) 3. 自らの研究について, 適切なプレゼンテーションができる。(DPの「研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 発表・討議への取り組み (50%), (50%) により評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は, 100点をもって満点とし, 秀, 優, 良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし, 必要と認める場合は, 合格, 了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス			
【授業計画】 第1回 オリエンテーション 第2回 テーマ設定について (以下, 指導ゼミ毎に) 第3回 テーマ設定について 第4回 テーマ設定について 第5回 テーマ設定について 第6回 研究計画について 第7回 研究計画について 第8回 研究計画について 第9回 研究計画について 第10回 研究計画について 第11回 研究計画について 第12回 第1回中間発表会への参加 (6月下旬) 第13回 第1回中間発表会への参加 (6月下旬) 第14回 研究調査について 第15回 研究調査について 第16回 研究調査について 第17回 研究調査について			

- 第18回 研究調査について
- 第19回 研究調査について
- 第20回 研究調査及び分析について
- 第21回 研究調査及び分析について
- 第22回 研究調査及び分析について
- 第23回 研究調査及び分析について
- 第24回 第2回中間発表会への参加（12月中旬）
- 第25回 第2回中間発表会への参加（12月中旬）
- 第26回 分析及び考察 論文執筆について
- 第27回 分析及び考察 論文執筆について
- 第28回 分析及び考察 論文執筆について
- 第29回 分析及び考察 論文執筆について
- 第30回 分析及び考察 論文執筆について

【授業及び学習の方法】

基本的にはゼミ形式により行い、専攻全体での数回の発表会への参加を含む。

ゼミの教員の指導のもとに発表や議論を行って、研究テーマの明確化・決定、研究方法の明確化・準備及び実施、結果の整理・分析、考察、修士論文の執筆につなげる。

国内の臨床心理学に関する研究動向と共に、諸外国の臨床心理学の先端の研究動向を参照する。

【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】

準備学習：文献等を読んで内容、疑問点、意見をまとめておく。発表者はそれらを発表資料として準備する（各回2時間、計60時間）。

事後学習：授業中の議論内容や教員からのコメントを振り返り、研究法に関する考察を深めるとともに、自分自身の研究への応用を考える（各回2時間、計60時間）。

教科書・参考書等

必要に応じて紹介する。

オフィスアワー 各教員のゼミの時間前後に研究室にて行う。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

自分の関心・問題意識のもとに主体的に取り組むことが望まれる。また、討議にも積極的に取り組むこと。

この授業で得た知識と技術を活用して修士論文研究を進め、以下の日程で修士論文を完成させることが期待される。

学位論文提出（1月中旬）、学位論文審査（1月下旬～2月初旬）、学位論文公開発表会（2月中旬）